



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	個性化の状況論：ロールシャッハ状況の現象学的分析
Author(s)	田澤, 安弘
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 86, 265-296
Issue Date	2002-06
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.86.265
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28866
Type	departmental bulletin paper
File Information	86_P265-296.pdf



個性化の状況論

—— ロールシャッハ状況の現象学的分析 ——

田 澤 安 弘

Aspects of Individuation in Bipersonal Field: A Phenomenological Approach to the Rorschach Situation

Yasuhiro TAZAWA

目 次

I. はじめに	265
II. 可視的光景の次元	266
III. 間身体性の次元	268
IV. 教示の意味	269
V. 前述語的经验の次元	271
VI. 言語行為の次元	273
VII. 間主観的相互行為の次元	275
VIII. 図版という枠組の外部地平へ	276
IX. 個体化の構造と意味	281
X. 個体化のスタイル	284
XI. 結語	286

I. はじめに

一個の人間がひとつの全体として個性化するためには、人生という歴史的な過程が必要である。個人であることと全体の一員であることの狭間に置かれながら、あるがままに自分らしく生き抜くことが、すなわち個性化の過程なのであろう。

しかしながら、そのような過程すなわち時間は、客観的な時計時間のようにただ単に流れ去るものではない。果報は寝て待てとはいうものの、われわれにとって、個性化の過程である生命的時間（生きられる時間）はみずから動くことによって、つまり他者とともに相互行為を営むことによって、そのつどという有り様の中で創出されるように思われるのである。

本論では、一定の状況内でそのつど自己を成立させる有り様を「個体化 (individuation)」と呼称し、一生涯をかけて全体性ないしアイデンティティの達成へと向かう「個性化 (individualization)」と区別して考えることにする。つまり、個体化を個性化の最小単位と見なし、一定の状況をそのつど個体化して生きることによって、終局的には歴史性としての個性化が達成されるものと考えerわけである。そして、この個性化へと通じているそのつどの個体化について、状況論の視点から叙述するのが、本論の主たる目的である。そのため、理解しやすいように、通

常の対面状況ではなくより構造化されたロールシャッハ状況を取り上げ、自己の個体化と表裏をなすものであるが、一個の反応が個体化するとは一体どういうことであるのか、その前提から解き明かすつもりである。

これまで、ロールシャッハ反応を超えて、それが表出される状況そのものに目を向けた研究者として、Schafer, R. (1954) と Schachtel, E. G. (1966) をあげることができる。彼らは、テスターと被験者の関係が反応に及ぼす影響を、主として精神分析学的な視点から叙述している。本論では、彼らが叙述している、分節化した人格同士が織りなす対人関係の次元をさらに遡って、状況そのものの構造を解析するつもりである。「～のように見える」という言葉が被験者によって表出される以前の世界を、換言すれば、本来であれば主題化されることのない次元を明らかにし、個体化の本質に迫るつもりである^{#1)}。

II. 可視的光景の次元

Merleau-Ponty, M. (1945) は「われわれがはじめにもっているのはいったい何であろうか」と自問し、それに対して「世界という地の上の或る知覚野である」と結論している^{#2)}。この最初の知覚野の中にあるのは「もろもろの性質のモザイク」ではなく「全体的な布置」であって、ここではいまだ何も主題化されていないし、対象も主観も措定されていないのだが、われわれの身体が世界と関与するためには、このような始元的な知覚野がすでにいつも与えられていることが不可欠である。したがって、被験者が検査室に入室して図版を手にする以前に必要なのは、その場が照明によって可視化されていて、図版が図版として、椅子が椅子として、テーブルがテーブルとして存立し得るようになっていて、つまり事物とその属性である色が見えるようになっていてことである (Gibson, J. J. [1979] の言葉で言えば、主体が関与する以前の「見ようとすれば見ることのできるある面 (potentially visible surface)」が存続していることである)。あまりにも自明のことであるが、多彩色のプロットを含む複数の図版が提示されるロールシャッハ状況は、可視的光景として構造化されていることを、つまり「(Newton の光学のような――筆者注) 光としての光においてではなく、中身のある空間、きわめて捉えにくい非常に濃密な物質に出会ってはじめて出現してくる光を介して」(Goethe, J. W. v., 1820) いることを前提として成立するのである。

廣松 (1982) は「視覚的对象認識においては『見られる物』と『見る者』とがまさに空間的に分離・離在した構図で現識される。そこでは、見える対象が先方 (あちら) に、そして「この身体」が此方 (こちら) に、分離・対立した構図で現出する。両者を隔てている中間部の「空間」は一般に『地』となっており、それは『図』としての対象や身体とは異なって明識されず、謂うなれば「無化」されている」と叙述している。ロールシャッハ状況が可視的光景として構造化されているときには、このように自己と他者、自己と事物、事物と事物との中間部にある空間、すなわち形のない「あいだの空間」(Metzger, W., 1953) が地として背景化しているわけである。しかしながら、廣松が言うように空間が無化されているとはいえ、それはまったくの虚無というわけではない。

例えば、われわれにとっては無化されているはずの空間そのものが、ある種の実体性を帯びて現出する事態について、Merleau-Ponty (1945) は「ある患者は一枚の紙に字を書こうとするが、ペンでもって白の厚みのようなものを突き通すようにしたあとで、やっと紙にたどりつ

ける。この「色の厚みのようなもの」かさばりは、問題になる色〔の種類〕に応じて変動するのであって、つまり、それは言ってみれば色の質的本質の表現なのである」と叙述している。また、このような精神病理学的現象ではないが、われわれは窓から差し込む陽光の色を単純な光学的状態として、すなわち特定の明るさや色調を備えた光の織物として捉えることがある。これらは、特定の事物と結びついてその属性として意識される「表面色 (surface colours)」ではなく、事物の周囲に拡散する雰囲気的な色として特定の空間を満たす「空間色 (volume colours)」や、特定の事物とは結びつかない単純で平面的な質としての「平面色 (film colours)」(Katz, D., 1925) と呼ばれる現象である^(註3)。

このように「われわれにとって色は、ある場合にはいわば宙に漂う光の形成体、光の構造体なのであり、ある場合には、おのれ自身を見せるのではなく、むしろおのれを通して別のものを見せる」(Cassirer, E., 1923; 1925; 1929) と言える。そして、あいだの空間が現出するときには、ある面と別の面を区別すること、すなわちひとまとまりの面とその背後との関係である前景と後景の分節が失われて、事物を知覚すること自体が困難になるのである。「視覚物が現れるのは、私のまなざしが光景の指示に従いつつ……照明された表面に……到達する場合である」(Merleau-Ponty, 1945) から、仮にあいだの空間が光の織物によって占有されたとすれば、そこには被験者と図版との対の関係（後述する）をつなぐ形のない媒体の厚み、つまり「始元的な奥行」(Merleau-Ponty, 1945) が現出するだけで、図版の知覚は成立しないであろう。したがって、このような状況は、前景と後景すなわち可視性と不可視性による構造化が欠如していて、ロールシャッハ状況としては不適切なのである。

事物である図版（照明されるもの）が知覚されるためには、光の織物（照明光）は背景に退いている必要がある。つまり、ロールシャッハ状況が成立するためには、照明された事物と照明からなる構造、すなわち見えるものと見えないものからなる構造が設立されて、「物質と透明な媒質との境界面」(Lombardo, T. J., 1987) としての表面が見えるようになっていなければならない。Merleau-Ponty (1945) が「照明と反射光がその役割を果たすのは、それらが控えめな仲介者として目立たなくなる場合とか、それらがわれわれの視線を引き止めるのではなく、これを導く場合だけである」と叙述しているように、被験者にとっては、おのれを不可視なものとして背景化する照明光を媒介としてはじめて図版の面とその色が可視的になるのであり、ロールシャッハ状況は図版の可視性とあいだの空間の透明な不可視性という対照（前景と後景の分節化）によって、構造化される必要があるのである。

以上、世界という地の上に現出する、始元的な知覚野としての可視的光景について叙述した。しかしながら、このような外面的空間である知覚野は、それだけで存立するというわけではない。それは、身体空間である運動野とひとつの実践的体系を、換言すれば、知覚と運動は構造的円環としての「ゲシュタルトクライス (Gestaltkreis)」(von Weizsacker, V., 1940) を形成しているのである。したがって、このことから「もし私が身体をもたなければ、私にとって空間など存在せぬことになる」(Merleau-Ponty, 1945) とも言えるわけであるから、対象がその上に図として浮き出すことを可能とする、あるいは「図と地という構造にいつも暗々裡に想定されている第三の項」(Merleau-Ponty, 1945) としての、身体性について叙述しなければならない。

III. 間身体性の次元

Merleau-Ponty, M. (1951) は、「〈私の身体〉とは……そこでさまざまな内受容的側面や外受容的側面が相互に表出し合っている一つの系なのであり、少なくとも萌芽としては周囲の空間やその主な諸方位とのいろいろな関係を含んでいます。私が自分の身体について持っている意識は……『体位図式』であり、鉛直線とか水平線とか、また自分がいる環境のしかるべき主要な座標軸などに対する〈私の身体位置〉の知覚なのです」と叙述している。まず、被験者は検査室に入室して着席するが、その部屋には様々な家具調度の類が設置してあるだろうし、窓の外には景色が見えるかもしれない。さしあたって、被験者は「今ここ」にある自己身体を定位ゼロ点として、それを中心とした周囲（身の回り）である「そこ」に諸事物を配置するであろう。ここに、被験者が身を置く「絶対的ここ」を原点とする、上下、左右、前後といった非対称的な空間枠組を有するキネステーズ空間が基礎構造となり、遠近法的なパースペクティブ構造を持つ中心——周辺世界が構成されることになる。知覚はさしあたって射映的に与えられるだけで、Heidegger, M. (1927) によれば、最も根源的な次元すなわち行動的（実践的）な空間においては三次元性が秘匿されているのだけれども^{註4)}、そのような「二次元的『諸面』は三次元的『深さ』によって補完される必要があり、その深さの次元では私に対して立ち現れるすべての事柄は、経験の機能中心としての私に対して、より近くにあったり、あるいはより遠くにあったりする」（Waldenfels, B., 1971）のである。

次に被験者は、一定の教示を受けた上でテスターから図版を手渡される。被験者の「ここ」は、もはや外面的座標との関係で方位づけられたひとつの「位置」ではなく、図版に対する活動的な身体の投錨、あるいはプロットを解釈するという課題に直面した「身体状況」へと変貌する。図版を手に持って定位することによって、さしあたって手だけが強調されて、身体全体は「まるで彗星の尾のように手の背後へと流れていっている」（Merleau-Ponty, 1945）わけであるが、この段階では地面（世界）に支えられた身体全体すなわち身体部位の位置や姿勢の全体が地となって、両手による図版の定位がその上の図として経験されることになる。しかしながら、あいだの空間がそうであったように、このような両手を含めた「視点の場としての身体性の地帯」は、対象がその前に現出するためには「舞台上の光景を照明するに必要なホールの暗さ……明確な存在や図形や点をその前に現出させ得るための非＝存在の地帯」（Merleau-Ponty, 1945）として、空虚に背景に退いている必要がある。つまり、あいだの空間によって可視化された、見られる物である「図版」と見る者である「この身体」からなる未分化な地の上に、明確な対象が図として浮かび上がるためには、両者が「分極化（polarization）」（Werner, H., 1948）して身体が地として無化されることが不可欠なのである。このようにして「一切の図は、外面的空間と身体空間との二重の地平の上に姿を現す」（Merleau-Ponty, 1945）ことになる。

また、図版を手渡されることによって、部屋に存在している様々な事物の中から図版が選択され、それがロールシャッハ状況における志向的对象として間主観化されることにもなる。Waldenfels (1971) が言うように、「個人としての私が世界を地盤としてはじめて活動的となるのと同じように、われわれは或る共同の世界を地盤として活動的となる」のである。そして「一切の知覚はひとつの交わり（communication）もしくはひとつの合体（communion）であって……われわれの身体と物とがいわば対になること」（Merleau-Ponty, 1945）であるから、ここ

で被験者の身体と事物である図版との間に対する関係が成立するに至る。反応の個体化が自己の個体化と表裏をなしていると言い得るのは、このようにして「交叉配列(chiasme)」(Merleau-Ponty, 1964)された被験者と図版との間に、対の関係が成立すればこそである。

その一方で、被験者と同様にして、テスト側の側にもキネステーズ空間が構造化され、その身体と図版との間に対する関係が成立している。被験者とテスト側の二人が、一定の規則の中で、ロールシャッハ状況において営む相互行為は、「〈私の行動〉と〈他人の行動〉という二つの項をもちながら、しかも一つの全体として働くような〈一つの系〉」(Merleau-Ponty, 1951)をなしているわけであるから、被験者の身体と図版との間に成立する対の関係は、テスト側の身体と図版との間に成立する対の関係と、ここで交叉し合うことになる。Merleau-Ponty (1957)は「独我論的に知覚された事物が〈純粋な事物〉になることができるのは、わたしの身体が魂をもつ他の身体と組織的な関係を取り結ぶときだけである」とか「わたしの目の前にある事物は、本当の意味ですべての人々にとっての事物である。純粋な事物は間身体性の相関物として、受肉した主体の理想的な共同体の相関物として、はじめて可能になる」と叙述しているのだけれども、事物である図版がひとつの事物であることを可能にするのはそれが被験者とテスト側の「あいだに」あることにおいてであり、そのことと表裏をなすようにして互いの身体は図版を媒介として対となり、被験者とテスト側の間には「間身体性 (intercorporéité)」(Merleau-Ponty, 1960)が成立することになる。

このように、ロールシャッハ状況は、「図版」「被験者」「テスト側」という三つの極を構成契機として成立すると同時に、互いのキネステーズ空間が交錯し合う場であり、図版という主題領域は、被験者の「今——ここ——私」とテスト側の「今——ここ——私」という二つの中心によって間身体的に構造化されている。したがって、ロールシャッハ状況は、図版を媒介とする二つの中心によって織りなされた、ひとつの間身体的空間として規定することが可能である。そして、Waldenfels (1971)が言うように、「ある人が他の人とともに、その二重となった行動のなかで、ある事柄に向かっていて場合に統一が形成されるのであり、その個々の行動はたがいに交錯しあい、共同のものとなる第三のもののなかで出会う」のであるから、二つの中心構造によって間主観化された図版は、被験者とテスト側がひとつのシステムとして相互行為を営むための場を設定するのである²⁵⁾。

IV. 教示の意味

流れとしては、すぐさま前述語的经验 (知覚) の次元について叙述すべきであろうが、ここで教示の意味について検討しておく。というのは、間身体的空間としての対面状況を一定の規則によって方向づけし、他ならぬロールシャッハ状況として構造化するのはテスト側の教示なのであり、それによって他の対面状況とは異なるロールシャッハ状況固有の前述語的经验や言語行為が成立することになるからである。以下に、教示の意味を「志向の対象としての図版の共有化」「主題としてのプロットの選択」「メタファーとしての主題の同定」という三点に絞って検討する。

まず「志向の対象としての図版の共有化」である。Waldenfels, B. (1971)は、「相互了解の対象は……共同のここにあるこのもの (Dies da) を相互了解の究極の基体として指示している。そしてこのことが表現的な了解のための地盤を与えているのだとすれば、それは私のものと汝

のものという分離に先立っていて、しかもその分離を許容するものでなければならない」と叙述している。被験者とテスターにとって「共同のここにあるこのもの」あるいは「共同のものとなる第三のもの」とは図版のことであるのだけれども、図版が間主観的な事物として共有されるのは、テスターの先取りの枠づけである「何に見えるか」という問い、つまり教示によってである。この教示によってロールシャッハ状況が一定の規則によって構造化され、状況そのものである既述の始元的な知覚野や間身体的空間が潜在化して地となることで、図版がその上に共同の志向の対象として分節化されるに至るのである。

この段階における図版は、例えば、机の上にあるペンや電話などの事物と同じく、経験の場であるロールシャッハ状況にともに与えられ、意識の中に併存している、多数の事物の中のひとつとして選択される。図版が志向の対象として選択されることによって、多数の事物は背景として意識の周辺に後退すると同時に図版の外部地平となるのだが、そのことと相即して、図版そのものが能動的に把握されるべき内部地平として限界づけられるに至るのである。

次に「主題としてのプロットの選択」である。テスターの教示は基本的に「何に見えるか」であって、「これは何か」ではない。「これは何か」すなわち「この図版は何か」と問われるのであれば、例えば「インクで描いたただの染み」であるとか「絵の具をつけて真中から折ってぱっと開いてできた絵」のように、図版の紙面全体を網羅するような答え、つまりプロット領域と空白領域を含めて図版全体が図化されるような答えが理想となるであろう。そのためには、必然として、図版の二次元平面そのものを超えて図版を内に含むような説明（例えば例証としてあげたような、動作や運動が含まれた図版の作り方）や、あるいは図版そのものを下位分節化してそれが部分として包含されるような、図版を超えた一全体が図化されるような説明が引き出されることになるのである（図版を超えた全体とは、地化されて潜在化しているはずの外部地平のことである）。

しかしながら、「何に見えるか」という問いは、図版の紙面全体ではなく、白地の上に描かれた実体的存在としてのプロットへと、被験者の注意を向けるように作用することになる。というのは、後述するように、図版を目の前にした被験者にとって最も目に入りやすいのは、強ゲシュタルトをなすプロット全体の布置であるのだけれども、このような図版の特性とテスターの教示が一体となって、被験者に対して暗に方向づけが与えられることになるからである。したがって、ロールシャッハ状況において指示すべき「これ」であり「～のように見える」と主題的に同定されるべきなのは、図版そのものではなくプロットなのであり、それは教示によって方向づけられるのである。

最後に「メタファーとしての主題の同定」である。「これは何か」ではなく「何に見えるか」という教示には、プロットをメタファーとして捉えるべきことが暗示されている。Langer, S. K. (1957) は「絵画は本質的にそれが描出するもののシンボルであり、その複写ではない」と叙述しているのだけれども、この意味で、プロットはひとつのシンボルとして、ロールシャッハ状況はそれを解釈するためのひとつの「シンボル状況(symbol situation)」(Werner, H., and Kaplan, B., 1963) として、それぞれ規定することが可能である。後述するように、われわれの知覚野はすでに一定の仕方で構造化されていて、言語に先立って有意味な体験野として与えられるのであるが、テスターは被験者に対して形や色そのものを同定するように求めているのではない。そうではなくて、プロットを「～として見る (seeing as)」こと、あるいはプロットの「アスペクトの知覚」ないし「有機的体制化 (organization)」(Wittgenstein, L., 1967) を求め

ているのである。

Hanson, N. R. (1969) は、この有機的体制化について、それが「線や形や色が視覚的に捉えられる仕方では視覚的に捉えられるようなものではない」こと、「それはむしろ、線や形や色が視覚的に捉えられるその仕方」であり「線や色とのある与えられた布置……やパターンが視覚的に捉えられる様々な仕方」であることを叙述している。つまり、プロットをメタファーとして何かに見立てることは、平面上の視覚的布置やパターンを地として潜在化させてそれを何か「として」見ることで、すなわちひとつのアスペクトをそのような地の上に顕在化させて意味を体験することなのである。Boehm, G. (1978) が言うように「境界 (Grenze), あるいは軌跡 (Spur)」という述語で把握することのできるものの本質は、模写ということにあるのではなく、形象なしには、しかも形象から切り離されては見るることのできないものを可視化することにある」のだけれども、われわれが例えばジャストロー図形 (ウサギ—アヒルの頭) をウサギ「として」もアヒル「として」も見ることができるのは、それに描かれた軌跡が有機的に体制化されて、あるもの「として」そのかたちが可視化されるからなのである^{註6)}。

V. 前述語的経験の次元

ルビンの反転図形からも理解されるように、図と地の境界線はそのつど一方の輪郭線として知覚される片側性が特徴であるのだが、このことは「それぞれの境界線の関係がたがいにまったく一義的に決定されるのではなく、たがいのあいだで自由な動き (Spiel) を許しあっていること」(Boehm, G., 1978) を意味している^{註7)}。造形的形象であるプロットは、このような境界間の移行 (自由な動き) である「側生的 (lateral) な網状組織 (Geflecht)」(Boehm, 1978) の活動によってそのつど構造化され、その地となる図版の紙面全体は、境界間の関係と対照の開かれた領野として形成されているのである^{註8)}。そして、このような「境界の多様な相互依存可能性と、そのつどの境界内の内容的まとまりから、あいだの空間 (Zwischenräumen) という事実が生じてくる」(Boehm, 1978) ことになる。

ここで言う「あいだの空間」とは「二次元的に広がった連続体である画面という媒体が色や線やまとまった面によってかたちづくられるや、そこに生じてくる」(Boehm, 1978) ような背後空間で、いわゆる地のことである。プロットは境界間の自由な動きによって、ひとつのまとまった平面として (ある種の迫力によってそれを見るように強制力をもって働きかけてくる) 強ゲシュタルトをなし、あいだの空間との対照から際立ちを得るのだけれども、あいだの空間そのものはプロットを見えるものとして可視化し、それと相即しておのれを見えないものとして背景に退くことで潜在化するに至る。つまり、空気のように不充填的で「不規則的なあいだの空間が、個々の形象存在 (たとえば人物像) に輪郭を付与する」(Boehm, 1978) ののである。

このように、前述語的経験の次元では、プロットは個々の境界を持ち、個々のひとまとまりの面を持ち、個々のあいだの空間との対照において成立する、ひとつのまとまったシステムすなわち「かたち」として現出する。つまり、被験者が図版を目にするやいなや、表面の色を属性とする全体的な布置としてのシステムへと直観が向けられ、プロットがまず端的に知覚的な全体として目に入るのである。しかしながら、このシステムは、他の諸事物から分離して限界づけられた内部地平としての図版が、境界の側生的な網状組織の活動性、すなわち同質性による融合と異質性による対照によってプロット領域と空白領域へと分節化し、その一方である空

白領域があいだの空間として背景に退くことで、その上に図として可視化されるという過程を経たものと考えられる。すでに述べた図版の外部地平におけるあいだの空間がそうであったように、図版という内部地平におけるあいだの空間も、われわれの意識にとって通常は透明化しているのである。

この段階に至ると、図版の白地の上に図が分節化して、ひとまとまりの面である図とその背景である地との間に奥行きが生み出される。換言すれば、反射力の異なる二つの面が同一の二次元平面（図版の紙面）に存立することによって、図が表面色として現出し、平面色である地から浮かび上がって前方に定位されると言えるであろう（Wever, E. G., 1927）。それまでは図版の紙面そのものが内部地平（Gibson, J. J. [1979] の「包囲光（ambient light）」によって照らされた「照明されている面（illuminated surface）」の位置を占めていて、それがプロット領域と空白領域へと同位的に（すなわち地の上に図が分節化するのではなく、それらが横並びに）分節化していたのだけれども、今度はその空白領域である図版内のあいだの空間が外部地平として限界づけられることによって無化され、規定されるべき内部地平としてプロットそのものが図化されるのである。この内部地平の全体構造は、それぞれの部分構造によって分節化される新過程が展開することによってさらに明晰なゲシュタルトとなり、それと相即して地であるあいだの空間もさらに意識野から無化（不可視化）されるに至るのであり、高度に分節化したゲシュタルトにおいては、あたかもそれ自体で自己完結的に（それを可視化するあいだの空間なしに）存立しているかのような様相を呈するのである。

さて、われわれが網状組織の広がりに応じてプロットを眺めていくと、そこに現象が立ち現れて意味が発生し、何かあるものの「かたち」が現出することになる。つまり、単なるプロットに過ぎなかったものが「何か（Etwas）」あるいは「より以上のもの（Mehr）」として「コウモリ」や「人間」などに見えるのだが、このような有機的体制化の現象は、知覚的経験が感性的経験でありながらつねにすでに何らかの意味の担い手であり、その意味を直接具体的に表示するようなあり方をしていること、すなわち「シンボル〔による意味〕の受胎（symbolische Pränanz）」（Cassirer, E., 1923; 1925; 1929）によるものと考えられる。

受胎という表現は「ここにいま与えられている個別的な知覚現象が、ある特徴的な意味の全体に理念的に織り合わされ関係づけられている」（Cassirer, 1923; 1925; 1929）事態を名指そうとしたものである。ここには、知覚経験の「現前的な内容」である「直接与えられている姿」と「表出的〔＝再現前化的〕内容」である「見え姿」が分かちがたい二つの契機として統合されていること、つまり、現前的内容であるプロットと表出的内容である「あるもの」（例えばコウモリ）という両契機を統一する、「～として（見る）」という関係性こそが第一の直接的契機であることが含意されている。このことを色で例証すると、例えば、現在の感覚印象として与えられている瞬間的個別的な「この赤」は、単に「今ここ」における個別的な色体験として受け取られるだけでなく、「ひとつの赤」として、「この赤」の代表しているひとつの「種」の範例としても意識されるのだけれども、このことがすなわち「色のある個別的なニュアンスが単なる光印象として受け取られている場合でさえ、それは単に『現前している』だけではなく、同時に『表出的〔＝再現前化的〕』でもある」（Cassirer, 1923; 1925; 1929）ことを意味しているのである。

このように、われわれに与えられる知覚野は言語によって分節化される以前に、すでに「シンボルの受胎」によって、非言語的な意味が存在する領野として自己構造化されている。そこ

に現出するものは、われわれにとって絶対的に未知というわけではなく、すでにいつも「ある種の図式的な下図」によって「特定の基本的なクラスにしたがって区分されたもの」(Cassirer, 1923; 1925; 1929)として、類型的に現れてくるのである。このことは、緑や青などとの対比における赤という色がすでに類型的であることから理解されるであろうが、換言すれば「具体的な赤は、或る一般性を地にして浮かび上がってくる」(Merleau-Ponty, M., 1945)と言えるであろう。そして、そこには個別性(“この赤”)と普遍性(個別的な赤の印象が属する種の代表である“ひとつの赤”)を媒介する「スタイル」(Merleau-Ponty, 1964)が存在しており、身体と世界の関わりとしての知覚野を、個別的であると同時に普遍的なスタイルによって、そのつど構造化しているのである^{※9)}。

以上、前述語的经验の次元について叙述したが、ここにおいては、プロットがまず端的に全体として把握され、その基体が内部地平と外部地平の両面にわたって重層的に規定されることによって構造化されていること、その領野が意味分節の活動によって「として」というかたちで自己構造化していて、いつもすでに一般的な類型性と様式性(スタイル)によって先取的に枠づけされていることが理解されたであろう。知覚野のこのような意味の分節化は、自我を触発してその対向を促進するが、われわれはこうした受動的な非——主題的自己構成を前提として、言語による能動的な主題の構成へと展開することが可能となるのである。次に、知覚野の潜勢的構造が展開されて、言語によって現勢化される段階について叙述する^{※10)}。

VI. 言語行為の次元

われわれがロールシャッハ状況で用いる言葉は、物理学的ないし生理学的な文脈の中で用いられる「物理生理学言語」ではなく、日常的な「知覚心情言語」(渡辺, 1988)である。そして、それには何らかの心情的相貌である「思い」が込められていたり、その人固有の「言い回し」が伴われていたりする。被験者は目に見えるプロットを解釈して、そうした思いや言い回しが附帯する固有の言語行為のスタイルによって、プロットの見え姿を言語へと移行させることになる^{※11)}。

しかし、造形的な形象であるプロットと言語という二つの異なる媒体間には、超えがたい「根底の裂目(Grund-Riß)」(Boehm, G., 1978)が存在している。そのような裂目を超えて両者が交流し合うためには、何らかの意味経験の通路が、あるいは互いに開かれた構造が不可欠である。

Boehm (1978) は, Saussure, F. (1916) の言語学について, 「Saussure は『一般言語学講義』において, 言語記号はその記号(音素)相互の境界づけによってはじめて意味を獲得するものであることを示した。記号はおのれひとりでは何も意味することはできず, その意味作用は他の意味の境界に対する意味の隔たりによってはじめて成立する。音声言語の特質を形成しているのは, あるひとつの構造を島のような個々の意味作用の現場から取り出すもろもろの境界線の網状組織である。そしてその内部で, それぞれの箇所が相互に関係し合い, それらの秩序的なまとまり方, つまり相関的な関係が, 何かを, 何かとして規定するのである。境界線は, ある意味の隣接する意味境界に対する隔たりを際立たせるが, そこで生じる対照こそが意味作用を呼び起こすのである」と叙述している。つまり「言語は, 固定した言葉の内容の総体によって語るのではなく, むしろ言語の諸要素の意味の隔たり(対照)によって語る」ということ,

「意味は言語のこの対照構造に結びついており、言われていないことを背景として分節される」ということを言明しているのである。

先に、造形的形象であるプロットがもろもろの境界線とそれによる対照によって構造化されていることを叙述したが、同様にして、言語も「境界の側生的網状組織の活動性 (Mobilität)」(Boehm, 1978) によって「沈黙の〈地〉の上」(Merleau-Ponty, M., 1969) に構造化されることが理解されたであろう。したがって、言語と造形的形象に共通する根本構造は、個々の要素としてのまとまりの間で対照と融合を引き起こしながら構造化してくる境界線の網状組織、すなわち境界間の移行という意味分節の活動性なのである。

このような異質な媒体間の構造的対応ないし同一性が共通の基盤となって、造形的形象と言語との間には「翻訳関係」(Boehm, 1978) が成立し、前述語的経験の次元において潜在的に予描されていた知覚野の受動的な分節構造は、能動的に探索された上で言語によって述定されることが可能となる。そして、テスターに提示すべき対象が「～のように見える」と述定される時、それまで不可分であった造形的形象の存在と現出 (現前的内容と表出的内容) が分離すると同時に、主語と述語が区別されて、反応が現勢的な次元で主題として定立ないし再分節化されるに至るのである。

しかしながら、知覚と言語の翻訳関係は一方的な過程ではなく、知覚による潜在的分節化と言語による顕在的再分節化との間には、循環性ないし「移行と反転 (Umkehrung) の構造」(Boehm, 1978) が認められる。例えば、質問段階において、被験者が「ここが手で、足で……」と説明するときには、そこに見たものを言語によって述定すると同時に、指差しという指示的身振りを媒介として知覚へと再帰しているのであるが、このことは、Boehm (1978) が「メタファー的な解釈学的反転という性格」がこの過程 (知覚と言語の翻訳関係) に伴われていて、「解釈の言葉が適切であったかどうかは、そのつどいつも形象という出発点の媒体への逆翻訳によって試すことができる」と叙述している通りである。

次に、反応と反応との間について叙述する。Merleau-Ponty (1988) が言うように「言語はある瞬間におけるゲシュタルトなのではなく、ある均衡に向かって発展している動きつつあるゲシュタルト」なのであり、それは「ひとたびこの均衡を獲得したとしても、その後まるで磨耗現象にでもよるかのようにならぬ均衡を失うこともあれば、別な方向に新たな均衡をもとめることもある」。このことは、ロールシャッハ状況における被験者の言語行為についても言えることであるが、以下に Wittgenstein, L. (1967) のアスペクトの「恒常的な見え」「ひらめき」「変移」という三つの概念を用いて叙述する。

まず、多義的で多様な現出を呈するプロットを前にした被験者は、そのアスペクトの「ひらめき」に晒されるだけで、さしあたって未決定の状態 (平衡状態への途上) に置かれる。そして、その未決定の状態が終結して平衡状態へと至るのは「多かれ少なかれ根拠づけられた定位を通して、ある可能性に向けて決断するとき」(Waldenfels, B., 1971)、すなわち被験者が「～のように見える」と述定するときである。このとき、動きつつあるゲシュタルトである言語は、平衡状態へと至ると同時に知覚ゲシュタルトが形態化されて、ひとつのアスペクトの「恒常的な見え」が固定化される。このようにして、ひとつの反応が被験者からテスターに提示されるわけであるが、被験者はさらなる「ひらめき」によって捉えられ、ふたたび未決定の状態に置かれてしまう。そして、被験者の決断によって言語が新たな平衡状態を獲得するとき、プロットそれ自体が変化するわけではないにもかかわらず、それまでの見え姿が別のアスペクトへと

「変移」し、そこに現出している意味が変化することになる。ここに、新たな反応が生み出されるのである^{#12)}。このように「何かを語っている人は、言語的境界線の側生的な網状組織、すなわち対照と〈メタファー的〉移行のうちで動く」(Boehm, 1978) のであり、プロットを目の前にした被験者はそのつど意味を生成することで、みずから反応を生み出すのである。

VII. 間主観的相互行為の次元

Waldenfels, B. (1971) が言うように、前述語的经验の次元における「或る種の非表現的共同性は、すでに『端的に知覚的なものの共同化』によって形成されている」のだけれども、このような共同性は、言語による伝達の対話の次元においては、「われわれ」の地平として捉え直すことが可能である。「われわれ」とは「実体的な全体性でもなければ個人の集合でもなく、前人称的結合態の同時的受容のもとでの、交互的な引き受けと譲渡における相互人格的な結びつき」(Waldenfels, 1971) のことで、廣松 (1972) はこれを、自他が明晰なゲシュタルトとして高度に分節化する以前のあり方として、自他の身体的分節がいまだ準地的=準図的であるような渾然一体相における「シャム双生児の共存体」として叙述し、それを「われとしてのわれわれ=われわれとしてのわれ」と呼称している。

このような、前述語的经验の次元において現勢的な対話の底層として機能する前人称的な「われわれ」は、伝達の対話の次元においては、聞き手と話し手(問いと答え)からなる役割の交換性および循環性という、社会的契機として現れることになる。廣松 (1972) は、こうした対話の領域のこちら側とあちら側に存立する相互に分節化された主体同士の共同性、すなわち「共軌的役柄」の間主観的遂行を「協働 (Zusammenwirken)」と呼称しているのだけれども、以下に、現勢的な伝達の対話としての間主観的相互行為の次元について叙述する。

すでに述べたように、被験者は図版を指示して主題を同定し、それをテスターに向けて「～のように見える」と提示することを求められる。それ自体がすでにテスターの問いに対する答えに他ならず、被験者の意識内部で自己完結的に終結するわけではないのであるが、ロールシャッハ状況における「自由反応段階」においては、テスターに対する一方交通的な対象提示の側面が前景に立つことになる。したがって、Waldenfels (1971) が「現になされている対話にとっては、何かがわれわれに共通に与えられているということだけでは十分ではなく、それが同時に主題化されて、或る唯一の『注意が向けられる核』にまで融合していかなければならない」とか「或る定立とそれに対応する他方からの定立が或る一つの相互了解のなかでの中するとき、はじめて対象の存在が明確にわれわれにとっての存在となる」と叙述しているように、反応が真の意味で間主観化されるのは「質問段階」においてなのである。

質問段階になると、被験者はテスターからさらに詳細な答えを求められるのだけれども、その際にテスターは「反応領域」「決定因」「反応内容」を評定するために必要な情報を入手すべく方向づけられている。このような意図は被験者に対しては秘匿されているのだが、基本的に、被験者の提示する主題がテスターによって理解されるまで、あるいはテスター自身がそれを同定できるまで、主題のさらなる明確化を求めて問いと答えは繰り返されることになる^{#13)}。つまり「われわれが関心をもって同一のものに向かって、同一の意味をとおして答え、それによってわれわれの外的かつ内的な注視の方向が収斂するとき、そして、また、われわれが同一のものに関わっていることを同時に一緒になって認めあうときに」差し当たって問いと答えは終結

し、「或る種の非表現的共同性の完全な現勢性が達成される」(Waldenfels, 1971)のである。

Waldenfels (1971) が「共同作用は或る『結合された統一的な行動』、多極的に構造化された全体運動であり、その諸部分の運動は相互に干渉し合い、パートナーの一方が退き、他のパートナーが表に出るとき、そのつど主導権が交代している。あらゆる会話の位相において、或るひとが主要な遂行にあり、他の人が参与の遂行にある」と叙述しているように、被験者とテストターは互いに補完的役割を果たし、対話の主導権は問いや主張によってそのつど移行する。このことを「立場の逆転」ないし「役割の反転」と呼称する。そして「このことはまさに、実質的な共同現勢性であり、その限界は、われわれが交互にのみイニシアティブを取りうる、ということだけ」(Waldenfels, 1971)なのであるが、被験者とテストターとの間で営まれる問いと答えの循環性は、互いの能動性と受動性が絡み合った「間主観的相互行為」として捉えることが可能である。

しかしながら、ロールシャッハ状況は、Habermas, J., and Luhmann, N. (1971) が叙述する「理想的発話状況 (ideale Sprachsituation)」, すなわち「コミュニケーションが外的な偶発的影響によって妨げられないだけでなく、コミュニケーション自身の構造から生ずる強制によっても妨げられない状況」であるとは言えない。というのは、Habermas は、この理想的発話状況について「コミュニケーションの構造それ自身が如何なる強制をも生み出さないのは、すべての可能な参加者に対して、発話行為を選択し行使するチャンスが対称的に分配されているときであり、かつその時に限られる、ということである。なぜなら、その場合には、対話の役割が原理的に交換可能であるだけでなく、対話の役割をそれとして認める際のチャンスの、従ってまた発話行為を選択し遂行する際のチャンスの、実質的な平等性も成り立っているからである」と説明しているのだけれども、ロールシャッハ状況は、被験者——テストターという非対称性が構造的条件として制約的に作用しているからである。

このようなわけで、対称性や平等性が達成されるのは、被験者に対するテスト結果のフィードバック・プロセスであると言わねばならない。ここに至ってはじめて「すべての参加者が自己の当初の立場を超えて、初めのばらばらな考え方よりもっと差異化され、分節化されたコンセンサスへとまとまってゆく」(Warnke, G., 1987) ことが可能となるのである。とすれば、われわれは、もはや心理療法の次元に踏み込んでいることになるのかもしれない。そして、心理療法の次元が拓かれるとき、ロールシャッハ状況の分析は終わりを告げるのである。

VIII. 図版という枠組の外部地平へ

これまでの分析によって、ロールシャッハ状況は、可視的光景の次元、間身体性の次元、前述語的经验の次元、言語行為の次元、間主観的相互行為の次元といった様々な次元が、内部地平と外部地平の両面にわたって、重層的に構造化されることによって構成されている（と言い得る）ことが理解されたであろう。本論がこれまで叙述してきたのは、言葉を変えると、ロールシャッハ状況を図と地の視点から分析するということでもあったのだが、ここからロールシャッハ・テストについて新たな提言をしようと思う。

これまででは、潜勢化した次元から現勢化した次元へと分析してきたのだけれども、次に、それを転回して再構成することにする。Gurwitsch, A. (1966) によれば、事物とその背景からなるわれわれの知覚野は、主題 (theme), 主題野 (thematic field), 辺境野 (marginal field)

という、それぞれ異なった原理によって統合される各部分に分節化されている（それぞれが対象知覚・環境知覚・自己〔位置〕知覚という不可分の三幅対に対応しているとも言える）。例えば、図版に描かれたプロットに注意を向けて知覚している場合、プロットが主題であり、そのプロットと密接な意義連関を持つ空白領域が主題野を構成している。主題となっているプロットは、現在見えているアスペクトの他にも様々なアスペクトを持っているが、それらを統一して同一のプロットたらしめているのが、部分が全体に依存するというゲシュタルトの結合原理である。それに対して、主題と主題野との連関を形成しているのは、図——地のゲシュタルト連関である。例えば、同じプロットが人間に見えたり、コウモリに見えたりすると、その相貌は全く異なったものとなる。また、同じコウモリが図（対象知覚）であったとしても、それが飛んでいたりと、ぶら下がっているといったように異なる様態で捉えられたとすれば、その地（環境知覚）は空であったり、洞窟であったりで、図と地の相貌はやはり異なったものとなるのである（後述する高次の構造においてはその地が潜勢化して言語化されることはない）。そして、これら主題と主題野に属さないものは、すべて辺境野に属している。例えば、図版の外部地平である家具調度の類、窓から見える外の風景、身体感覚（自己〔位置〕知覚）などがそれにあたる。

高度に分節化した反応においては、このような主題——主題野——辺境野という重層構造が、プロット領域——空白領域——図版という枠組の外部地平にそれぞれ対応すると同時に、主題野と辺境野が地となって潜勢化しており、主題のみが図として現勢化している。これを「高次の構造」と呼称する。ここでは、プロットを直接的に包囲する空白領域が意識野から無化されて白地として潜在化し、その地を直接の地盤すなわち下部構造として、その上にプロットだけが図化されて現出する。したがって、空白領域である白地とプロットである黒図との境界域に形成される外輪郭線によって、自己完結的に閉合した「かたち」の体験が構成されることになる。ここで構造化されるゲシュタルトは、次に述べる低次の構造によって基礎づけられた高次の構造であるから、反応は低次の段階における単層的なものとは異なり、肉厚のある重層的なものであると考えられる。さらに言えば、注意の焦点にある図の下部構造として地が意識野から無化される度合いに相即して、内的な部分構造がより分節化した明晰な図が構造化される新過程が展開することになる（廣松〔1979〕の哲学的表現では、単に地との反照的規定に過ぎなかったものが図それ自体の固有的規定として内自有化される、ということ）。

しかしながら、われわれは、主題が図版（プロット領域と空白領域を含む紙面全体）に対応し、主題野が図版という枠組の外部地平に対応する反応や、主題のみならず主題野と辺境野が現勢化する反応などの「低次の構造」について、これまではっきりと認識することがなかったのではあるまいか。テストの「何に見えるか」という先取りの枠づけによって、被験者は、図版を介在させて対峙する自己と他者（テスト）から構成されている「場」すなわちロールシャッハ状況から図版に描かれたプロットを主題として切り出し、それを図化してテストに提示しなければならないのだけれども、ここで求められているのは、互いの身体によって織り込まれた状況あるいは自己身体そのものを地として潜在化ないし下部構造化させて、その上に図版を、さらにその図版の上にプロットのみを図として現出させる（環境知覚と自己知覚を潜勢化して対象知覚のみを現勢化させる）ということである。

しかし、この段階で構造化される低次のゲシュタルトは、枠としての図版の紙枠を超えたメタ水準が地となり、その地を直接の地盤として図版という一全体が図の位置を占めて現出した

ものと考えられる。さらに言えば、図の位置を占めて現出した図版という一全体が、輪郭線を境界として相互に接続された黒図と白図へと、錯図的に二重構造化された分節態勢を呈しているのである（Wittgenstein, L. [1977] の「白がその他の純粋な色と同等に見えるとき（211）」に相当するであろう。日の丸の旗を想起されたい）。ここでは図が地の上に分節化するのではなく、図と地が準地的＝準図的に、すなわち同位的に等置されているのである。これを廣松（1979）にならって、狭義の「同位化の機制」と呼称する。

一例として、Wの顔反応について考察してみよう（以下、反応領域は片口 [1987] に従う）。Ⅶ図版に対する「鬼が笑っている。[これ（中央S）が口で、角（d 2×2）。全体（W）笑っている感じ。（？）ここ角で、目（D 1のP反応で鼻から顎として認知される外縁部分を地とするS）で]」という反応であるが、ここでは中央空白領域下段が「口」、中央空白領域中段が「目」、d 2が「角」、Wが「笑っている感じ」として規定されていて、個々の内部造作ないし面「相」としての黒図（プロット）と白図（空白領域）が、それぞれ等置されていることが特徴である。必然として顔全体の外輪郭線は閉合しておらず、その輪郭線をたどると、内部がすなわち外部であるかのような「メビウスの帯現象」（山中，1976）が認められる。仮に「これ全体が顔」という説明が自発的になされたとしても、本来的には目に見えない輪郭線を指摘するのであるから、その区切りは恣意的にならざるを得ないであろう¹⁴⁾。

このようなWの顔反応（すべての顔反応ではない）においては、図版という一全体が無地から異化的に現出している「あるもの」すなわち顔であり、それが（黒図であれ白図であれ）図としての面「相」と（白地であれ黒地であれ）地としての「面」相へと同位的に分節化し、それらが等置されていると言えるであろう。つまり、無化された白地の上に強ゲシュタルトとしての図が浮き立つのと相即して、その一次的な図が内的に分節化するのであれば、面「相」として図化された部分の直接的周囲である「面」相が地化されるという新過程が展開するはずであるが、ここでは、明晰なゲシュタルトが構造化される以前の一次的な図地成態の全体が顔として図化され、それが準地的＝準図的な二重構造を呈していると言える。同位化の機制が認められる反応は、図版の白地ではなくそれ以前の無地を、つまり図版という枠組を超えたある種のメタ水準を、図地成態がそこから現出する背景として想定しなければ理解されないのである。

次に、Ⅴ図版に対する「チョウチョの上の羽根が、上に伸びてははずの羽根が、もがれた感じ。[二枚が一枚欠けている（空白領域を羽根に見立てて、指先で恣意的に輪郭をなぞる）]」であるが、ここでは、潜在化しているはずの空白領域、つまり図版内のあいだの空間ないし見えないものが現出して、見えるものとしてプロット領域と補完的に等置されている。類似する反応には「花。本当はここ（中央垂直方向の空白領域）に茎があるんだけど（Ⅴ図版）」や「蟹の甲羅。ここ（プロット左右両外側の空白領域）に足がついてる（Ⅱ図版）」などがあるが、高次の構造の側から言えば「ない」ものが「ある」ものと化しており、空白領域において、欠損部分が有体部分として現勢化しているのである。

次に、Ⅶ図版に対する「あとクリスマスツリーのような。（？）こう色づかいが雪が掛かったように見えたんです。雪が掛かって、はっきりとは見えないんだけど、ランプ一本の明かりだとかいうふうに見えるかなと。ちょうど薄暗いところで見ているクリスマスツリー。（雪？）割と白くなってる部分。こういうとことか」であるが、ここでは、主題としての「クリスマスツリー」だけでなく、主題野としての「ランプ一本の明かり」に照らされた「薄暗いところ（あいだの空間）」が、無化されずに現出している（辺境野である視点ないし自己運動 [見ている]

も現勢化しているのだが、この点については広義の同位化の機制として後述する)。その他、例えば「海に浮かぶ島」(II・VII図版)、「壁にかかったギター」(VI図版)、「床にベターツと敷かれた毛皮」(IV・VI図版)、「絵の具のパレット」(X図版)、「～の絵(解剖図)」、「写真(レントゲン)」、「模様」などの反応も、同様にして、白地がいまだ無化されていないことが特徴である。というのは、いずれも空白領域が、海、壁、床、パレット、キャンバス(紙面)、被写体を包囲する大気、生地として、準地的＝準図的に等置されているからである(後述する画像知覚の二重性の観点から言えば、画像の面としての図版の紙面が反応の表面として現勢化しているということ)。また、このような構造を残したまま、内的に分節化した高次の構造に転換することなく、端的にあいだの空間が無化されるにとどまる反応には、例えば「絵の具」「血」などがある。

以下、広義の同位化の機制が認められる反応について叙述する。まず、自己中心的視点や自己身体ないし自己運動が現勢化する反応である。

「何に見えるか?」と問われる限り、本来であれば、視点や視角は反応それ自体からは捨象されるはずである。しかし、「正面から見たところ」「前から見た感じ」「上から見たところ」「ちょっと斜めから見た」「下から見ている」「パッと見た」「じっと見て」「ボーッと見ると」「～が落ちてくる瞬間をカメラで写した」などの表現(時間論の観点から言えば、いずれも現在の身体位置と癒合した静的な瞬時的スナップショットであり、十全な人間運動反応のような動的な持続的スナップショットではない)が付帯する反応では、身体を輻輳点とする知覚的パースペクティブの意識、つまり「今ここ」における身体的自己が現出していると言える。通常反応であれば、図版の紙面だけが図として分節構造を呈し、それがテスターに伝達されるはずである。しかし、ここでは、この図すなわち反応それ自体が下位分節化して、図版という枠組を超えて拡大された図が現出するに至っており、通常であれば地となって潜勢化しているはずの自己身体(自己運動)が現勢化して、図版と同位的に等置されるかたちで準地的＝準図的な相で現前しているのである。経験的に言って、このような表現が認められる被験者は対人緊張が強く、自意識過剰であることが特徴であるのだけでも、それに加えて自律神経系の過覚醒状態(発汗、頻脈など)の见られることが稀ではない。

次に、上芝(1977)の反応(診断はヒステリー)で例証してみる。X図版に対する「魔法使いたいのが、壺のようなのから、色々なものをばーと出したもの。[魔法使いより奇術師。この枠の外にいる。色々なものどンドン出してきた。ばーと出した感じ]」であるのだが、ここでは、図版という枠組の外部地平すなわち「枠の外にいる」奇術師が「色々なものをばーと出す」運動の主体として想定されており、被験者自身の言葉によって、図版という枠組の外部地平が鮮やかに言語化されている。この反応の運動の主体は、図版の外部地平に想定された「奇術師」であるが、VII図版に対する「島の断面図みたいな感じ。[こういうところ(上部微小突起)が家とかお城で、ここ(中央空白領域)本当は湖っていうか。(断面図?)切ったところ。遠くから見たとこ]」(筆者の自験例)では、図版の紙面を「切る」ないし遠くから「見る」という運動の主体は、被験者自身である。いずれにせよ、運動の主体がプロットに認知された主題にあるのではなく、図版という枠組を超えた外部地平にあることが共通していると言えるであろう。

これらは「言葉の言語」の範疇に納まる自己運動ないし視点の顕在化したものであるのだけでも、実際に身振り(自己運動)が現出する「身振り言語」が認められる際にも、図版とその枠組の外部地平である自己身体との同位化の機制を指摘することができるであろう。ここでも、十全な人間運動反応のように主題(形態)のうちに運動が自己完結するのではなく、運動

の主体が図版の外部地平に拡大しているのである（これについては[注釈 11]を参照されたい）。その他「睨まれているような感じするんです」という表現が付帯する反応からは、「睨まれる」という被視的自己が受動的位相において準地＝準図化されるのに相即して、自分を睨む（例えば）顔反応が能動的位相において準地＝準図化され、それぞれが同位的に等置されていることが理解されるであろう。また、反応の説明に際して「私の口の中にもこう筋があって」や「ちょうどここからここまで。胸のところ」のように自分の身体によって直接的に描出するもの（自己関係づけ）や、自我境界の障害として解釈されることの多い「コウモリ。こっちに向かって飛んでくる」という表現は、その瞬間においては図（例えばコウモリ）と地（自己身体）が反転して自己身体が図として現出しているわけであるが、これらも図版という枠組の外部地平である身体が現勢化して、下位分節化した図版と等置されるかたちで、自己身体（自己運動）が同位化していると言えるであろう。Schachtel, E. G. (1966) の言う「恣意的操作反応 (motor response)」, すなわちあたかも目下にする事物に対して直接的に働きかけるかのような表現もここに含めることができるであろうが、ここでは距離化された間接的な「静観の対象 (objects-of-contemplation)」ではなく、直接的な「行動物 (things-of-action)」(Werner, H., and Kaplan, B., 1963) に近い次元で図版が扱われており、自己身体（自己運動）と図版が同位的に等置されて渾然一体になっているのである（運動全般については時間論の観点 [田澤, unpublished manuscript a] から稿を改めて論じなければならない）。

次に、図版の面が他の事物の面と等置されるような類の同位化の機制が認められる反応について叙述する。

例えば、好悪図版を選択する際に発現した「相互関係づけ」すなわち「(Ⅱ図版に対して) 下血。ところどころに血がついている。気持ち悪いから [嫌い]。戦闘機の戦闘 (Ⅰ図版) で、おばあちゃん (Ⅱ図版) が怪我をして、血を流している」について検討してみよう。ここでは、目下の主題であるⅡ図版が、その枠組を超えた外部地平として潜勢化しているはずのⅠ図版と関係づけられることによって下位分節化し、双方が同位的に等置されている。図版と自己身体が等置されるのではなく、図版と他の図版が等置されているのである。このように理解すると、例えば「このまま壁に掛けておいてもいいような、シュールな絵ですね」のような何気ない表現も、新たな意味を持って立ち現れてくることになる。つまり、ここでは、高次の構造においては辺境野として地化されているはずの室内の壁が現出して、その表面と図版の面が関係づけられているのである。すでに述べたように「絵」という表現からも、プロット領域のみならず空白領域を含めた図版の紙面全体が図として現出していることが理解されるのであるが、高次の構造ではなく低次の構造において反応が分節化していることは、ここにも見て取ることができるであろう。

次に、図版の面がその外部地平である「あいだの空間」と等置されるような類の同位化の機制が認められる反応について叙述する。

例えば、X図版に対する「一人の人が立っている。[(?) 全体的に見て、どこがどうっていうのまでは考えなかったんですけど。(立ってる?) 人の顔なのかな。(顔?) ここが何か髭 (D 3)。このへん目かなくて (D 7)。だから目と鼻 (D 12) が近いんですね。この下 (手に持った図版から床までの空間を動作で示す) には身体があるんじゃないかなって。立ってるとは言えないかもしれないけど」であるが、ここでは、外輪郭線の不明瞭な顔反応と図版の外部地平に想定された身体が同位的に等置されることで、それらを部分構造とするひとつの全体が図化

されていることが特徴である。顔の内部造作である面「相」が指摘されているだけで、顔それ自体の輪郭線が閉合していない（指摘されていない）ことにも、図版の紙面が図として現出し、その空白領域が「面」相として、プロット領域が面「相」として、それぞれが錯図的に等置されていることが理解されるであろう。類似する反応であるが、例えばⅧ図版に対する「鎧を着た人が立ってるところ。[兜をかぶった頭（D 3）、顔（D 4）、肩、腕のところ（D 1）、胸（D 7）、胴（D 2）]」という反応も、「立っている」という表現から、やはり下半身を図版の外部地平に想定しない限り理解されないものである。つまり、図版の内部地平としての上半身がその外部地平に想定された下半身と同位化されることで一全体が構造化されているのであろうけれども、ここでは、あいだの空間がそのまま無化されて背景に退いた様相で、図版の内部地平にある図のみが現前しているものと考えることができるのである。

次に、複数の反応系列が同一の反応へと混融し、それぞれが準地的＝準図的に等置されている反応について叙述する。

例えば、Ⅸ図版に対する「これは焚火をしていて、その炎が鬼の顔になった‘感じ’です。[昼間の焚火。これ（D 6）が炎ですね。緑の煙（D 1）、オレンジの煙（D 3）。よく見ると、鬼の顔なんですよ。ね。（？）鬼というか、骸骨というか、骸骨ですね。（？）これ頭（D 4-S）、これ目（D 1内部造作S）ですね。鼻（d 4）、口元隠れてる（D 6）。あと、炎と一緒に出てきた‘感じ’（W-D 6）]」という反応であるが、ここでは、直前の反応の着想が混融して「今ここ」における目下の着想と等置されていることが理解される。つまり「炎（煙）」と「鬼の顔」という、分轄された二つの反応系列（主題）が同時的に併存しており、「（顔が）炎と一緒に出てきた」というかたちで結合されているのである。辻（1997）の言葉で言えば、「着想の終結」が不全であると表現できるであろう。このような反応に見られる同位化は、厳密に言えば、前述語的経験の次元というよりも、言語規定的な言語行為の次元へと移行した段階が問題となっている。つまり、継時的に浮かんだ異なる着想を同位的に等置し、その二重性から来る制約を思考すなわち言語行為の過程の展開のうちで捨棄しているのである（もちろん「焚火をする」主体が図版の外部地平に暗示されていることにも同位化が示されている）。この反応が高度に分節化したものではなく、漠然とした感性的体験にとどまったものであることは「感じ」という表現からも読み取ることができるであろう。

従来の基本的な解釈法が「反応領域」「決定因」「反応内容」に分類して評定の対象としてきたのは、概ね本論で言う前述語的経験の次元と言語行為の次元、それも図版という枠組の内部地平に納まる反応に限られていたように思われる。厳密に言えば、ここで例証したような図版という枠組の外部地平へと突出する反応でさえ、あくまでその内部地平に納まる反応として評定してきたと言えるであろう。われわれは、ロールシャッハ・テストの既存の枠組に拘束されてそのことを見失っていたのであり、被験者の個体化の様相をあるがままに捉えていたわけではないのである。

IX. 個体化の構造と意味

そのつどの反応が、高次の構造において個体化しているのか、低次の構造において個体化しているのか、それについて明らかにすることは、これまでのロールシャッハ・テストの風景を一変させるようなパラダイム転換をもたらす可能性を秘めているようにも思われる。以下に、

個体化の構造とその意味について叙述する。

Gibson, J. J. (1979) は、画像の知覚の二重性^{#15)}について「画像は、光で描かれたもの（写真）にしても手で描かれたもの（絵）にしても、すべて処理のなされた面であり、それは常に他の画像ではない面との関係で見られている。画像に表現された、面としての配置のもつ不変項の他に、同時に、画像の面そのものとしての不変項があるのである。その面は漆喰の壁であり、画布であり、パネル、スクリーン、そして紙であったりする。画像表面を被うガラス、その肌理、縁どり、額縁などは光の配列を作り、そしてそれらは知覚される。そこに表われている情報は二重のものである。画像は光景でもあり面でもあり、そして、一見矛盾しているようだが、光景は面の背後にある」とか「画像は、それ自体として面であり、しかも他の何かについての情報を表示しているものである。画像を見る者は、これは一つのパラドックスなのだが、それら二つの面とも見ないわけにはゆかない、というのは、二つの視覚的経験(awareness)は異なるものだからである。われわれは画像の面と画像のなかの面とを区別する。たとえば印象派の画家達の作品について、絵の照らされている状態と、絵の中で照らされている状態との違いを私達は見分けられる。二つの面には共通性がなく、二つの照らされている状態は同じものとするのでできないものである」と叙述している。そして「画像としての光の配列は、同時に生ずる二種類の、一つは直接的な一つは間接的な、把握を必要とする。実在しない虚なる面の間接的な把握——場合によって、それは知覚することであり、理解することであり、イメージを描くことであったりするが——に加えて、画像の表面を直接的に知覚することがあるのである」と結論している^{#16)}。

画像の知覚の二重性について廣松(1982)から具体的に例証すると、例えば、配景視(パースペクティブ)で言えば、低次の構造においては、プロットは二次元平面上の配列として、向こう側の先細りと手前の末広がりの形にとどまるのであろうが、そのような射映とは別の高次の構造においては、自己の視点(身体)を輻輳点として拡がり、先細りの形が消滅点となるパースペクティブな構図として現出するということである。立体視で言えば、低次の構造においては、射映的には平面にしか見えない紙面上の配列にとどまるのであろうが、高次の構造においては、二次元平面“以上の”立体相ないし二次元平面“以外の”立体相において知覚されるということである。このような画像の知覚の二重性、すなわち「相矛盾した概念が交差する独特な環境」(Merleau-Ponty, 1945)の止揚は、Merleau-Ponty (1942)が「様々な関係相互の関係として成り立つ高次の関係」とか「様々な構造をさらに構造化する高次の構造」として、つまり「関係の関係」や「構造の構造」あるいは「自乗された構造」を構成する働きとして、すなわち人間固有の「シンボル機能」として規定するものである。

画像知覚の二重性の止揚、すなわち低次の構造から高次の構造への構造転換とは、「彩色によって動きをもたされ光と影の戯れを見せていた表面が、立体幾何学的なまとまりをもち輪郭線によって構造化された表面に転じていること」であり、高次の構造に至ると「形体の三次元的な盛りあがり」つまり「三次元性と実体性とを手に入れることになる」(Panofsky, E., 1924, 1925)と言える。換言すれば、高次の構造への転換とは、単に平面的な質(平面色)であるに過ぎなかった色が、事物の属性すなわち持続的な性状(表面色)として分節され、秩序づけられ、様々な形式のうちに組み込まれるようになるということである。低次の構造から高次の構造へ、つまり平面色から表面色のレベルに移行すると、空間と形態が色の秩序を媒介にしてわれわれの前に現出し、純粋な色の現れ(いまだ体制化されていない癒合的で未分節な全体、あ

るいは部分——即——全体[pars-pro-toto]]がまったく異なる相互関係を結んで、新たな配列(一定の構造を備えた統一的な全体としての客観的統一)が獲得されるのである^{#17)}。

低次の構造と高次の構造によって反応の個体化を説明してきたが、すでに述べたように、反応の個体化と自己の個体化は表裏をなす現象である。理念的に言えば、反応に高次の構造が備わっている際には、自己の身体像が明確に形作られて、身体が自己完結的で分節構造をもった有機体として体制化されていることになる。したがって、このときの世界構成も、分節化した身体によって構築されるわけである。

しかしながら、低次の構造を備えた反応、つまり筆者が同位化の機制と呼称する特徴が認められる反応には、別の意味があるように思われる。この現象は、反転図形であるルビンの盃に対する「顔にもカップにもどっちにも見えます」という回答(ある離人症患者の実際の言葉である)と、すなわち図と地の同時的認知と構造的に同一視し得るものであろう。つまり、いずれも時間的な継時性において(白地の上に浮き立つ)黒図と(黒地の上に浮き立つ)白図を反転させるのではなく、黒図と白図という二つの面を渾然一体に接続して等置しているのである。図と地の反転^{#18)}は、Merleau-Ponty (1945)によって、両手を合わせた場合の触れる手と触れられる手との非両立的な反転的交替可能性として叙述されているが、このような反転ではない、境界線を互いの裏面として接続するふたつの図の等置は、市川(1992)が「曖昧にひろがった相互浸透的な原始感覚」として叙述する、触れる手(能動)と触れられる手(受動)を区別立てることのできない「合掌」という一状態に相当する現象なのであろう^{#19)}。

廣松(1972)はこのような身体の両義態勢、つまり能知的身体と所知的身体との同時的かつ相即的な二重性ないし未分化の一体性を、身体の皮膚の界面を超えてそのつど膨縮する生きられる身体として叙述している。反応であるゲシュタルトの分節(個体化)は、そのつどの自己身体に分節(個体化)と表裏をなしているから、図と地の同位化の機制は、自己身体が輪郭の明確な身体像すなわち自己完結的で内的分節構造を持った身体的自己へと分節化しているのではなく、自他の身体的分節がいまだ準地的=準図的であるような、あるいは皮膚的境界を超えて身体的自己が「そこ」へと拡大して浸潤するような、自他が対自的に区別立てられる以前の渾然一体相において現前していることを意味しているように思われる。つまり、同位化の機制が見られる図と地の等置された反応は、低次の構造を下部構造として分節化した自己身体ではなく、自他が接合して渾然一体となった「われとしてのわれわれ=われわれとしてのわれ」と表現し得るような、経験の低層で機能する低次の構造としての「われわれというゲシュタルト」なのである。

このような低次の構造が認められる際には、臨床事例であれば、個体化と自我境界形成の不全という否定的意味づけが与えられるのかもしれないが、もちろんそれ自体が精神病理を意味するというわけではない。Merleau-Ponty (1951)は、幼児の人格の構造が対人関係の場面に具体化された、前人称的で自他の未分化な「癒合的社会性」について叙述しているのだけでも、このような幼児の人格の構造は完全に乗り越えられるものではなく、成人の意識生活の底にも消失せずに存続していると言える。つまり「かの他人との不可分の状態、さまざまな状況の内部で他人と自己とが互いに浸食し合い、互いに混同されている状況、同一主体が多くの役柄に顔を出すといったことは、成人の生活にもまだ見られる」(Merleau-Ponty, 1951)のである。

われわれは、癒合的社会性の次元における低次の構造によって他人との関係を生きることが

可能となるのであろうし、成人としての間主観性もそれを地盤としてはじめて成立するのであろう。互いに共同することも、反目し合うことも可能であるのは、このような基礎構造がすでに成立していればこそである。ロールシャッハ・テストは、その非構造化性（多義性）によってわれわれの低次の構造をあらわにし、その次元がどのように生きられているのか、あるいはどのように乗り越えられているのか、それについての各自的なスタイルを見えるものとするのである。

低次の構造と高次の構造に二分して叙述してきたのだが、実際の反応の個体化は両者が様々な度合いで混合ないし統合された様相を呈しており、その人によって異なる様々な個性が認められるものである。個体化の個別的なスタイルについては詳細な事例検討によって明らかにするのが適当であるように思われるが（田澤 [1998 b; 1999 a; 2001 c] を参照されたい）、最後に個体化のスタイル一般について叙述する。

X. 個体化のスタイル

旧来的なロールシャッハ解釈に対する問題提起も含めて行なったのだけれども、これまで折に触れて言及してきた、Merleau-Ponty, M. (1945; 1951; 1964; 1969) の「スタイル (style)」という概念に注目したい^{※20)}。

スタイルとは、端的に言って、知覚の中に散在している意味を見えるようにする潜在的な意味志向の統一性のことであり、すでに与えられた実存によって「もろもろの状況をどう扱うかというその仕方」(Merleau-Ponty, 1945) のことでもある。一定の状況内における個体化にはその人によって異なる独自のスタイルが、すなわち「比類なく譲渡不可能な或るスタイル」(Merleau-Ponty, 1964) があり、知覚を取りまとめるその仕方、身体が世界に存在するあり方、身体的実存の身のこなし方、言葉を選択し発語するその仕方、他者と相互行為して関係を取り結ぶその仕方などからは、その人に固有の個性が放射している。それは、まさに Goethe, J. W. v. (1953) が「すべての生あるものは、まわりに大気のごときものを作り出す」と言うがごとくである。

しかし、スタイルは、このように個性を指示する概念である一方で、複数の人々のそれぞれの個体化の差異を超えた、それらに通底する一般性を指示する概念でもある。スタイルは、間身体性ないし間主観性すなわち他者との交通によって、知覚——運動の一般性であるあらゆる個人の身体の一般性へと拡散していくのである。その意味で、スタイルには個別性と普遍性の「媒介機能」^{※21)}があるわけであるが、このことは確固としたスタイルの一般性ないし普遍性が存在しないことと表裏をなすようにして、唯一無二の絶対的個性などないこと（個性的であるほど一般性を獲得するという逆説性の存在）を意味している。Merleau-Ponty (1945) が言うように、世界の開かれた統一性は決して完全には構成されない「未完の作品」に喩えられるのであるが、それに対しては「主観性の開かれた、無限定の統一性」が照応しているのであり、われわれは（世界がそうであるように）あくまで「未完結の個体」としてそのつど個体化するのである。

われわれテスターは、このように個別的（能動的）であると同時に一般的（受動的）でもあるような個体化のスタイルを、あるいは「表情、声、筆跡などのすべてに及ぶある独自の構造」(Merleau-Ponty, 1988) を捉え、それを忠実に描出しなければならない。被験者は、現に目の

前にあるプロットを解釈し、それを言葉へともたすことでそのつど個体化するわけであるが、本論において、状況の階層構造を可視的光景の次元から間主観的相互行為の次元に至るまで構成的に分析したように、その仕方であるスタイルには様々な次元がある。そして、その人固有の立ち居振る舞いの仕方、すなわち個体化のスタイルとは、われわれが伝統的に人格ないし性格と呼称してきたものを実現するその人に固有の仕草、つまり「他の人たちにもよく分るが、彼自身にはあまりよく見えない或る定式化の様式（表出のモード）」（Merleau-Ponty, 1969）に他ならないのである。

ロールシャッハ・テストによる現象学的知覚論（Shapiro, D., 1977）によって裏打ちされた人格の類型論に、Shapiro, D. (1965) の『神経症的スタイル』がある。彼は、多くの臨床事例との出会いを繰り返し、知覚、言語（思考）、行為などの様々な次元に認められるスタイルを、一定の類型的な一般性として分類した。それは、妄想的スタイル、強迫的スタイル、ヒステリーのスタイル、衝動的スタイルなど、伝統的な精神分析学的人格類型の延長線上にあるものだが、それにとらわれずに、ある独自の統一性を持って現前するその人のスタイルに注目したことや、現象学的な眼差しで記述していることに独創性があると言えるであろう。

しかしながら、このShapiroでさえ、廣松（1979）の言う「物象化的錯認」から、つまり「当事主体において地が無化され、図だけが顕出しているといっても、その図がいかなる規定性を呈するかは実は地の部分との区別的対照によって左右されるのであるが、当事主体の体験においては図の規定性は自己完結的で固有であるように覚知される」というような事態から抜け出しているわけではない。本論が半ば執拗にテストと被験者の両者を含めて間主観的に状況分析を行なったのは、そうした隘路から脱却することを視野に入れていたのであるが、伝統的な人格理解は、秋谷（1990）が言うように、図であるその人について自己完結的に記述するだけで、地である観察者（テスト）との関係ないし相互作用を無視してきたのである。

筆者は旧来的な人格概念を愚弄するつもりはないが、本来的に言って、そのつど個体化する個人はそれ自体として自己完結的に成立するのではなく、常に他者との関係（対照）において相互依存的に成立する、開かれた未完結の個体である。同様に、本論で叙述したように、ロールシャッハ状況における反応も、ゲシュタルト的分節化の具体的構造がテストとの間で間主観的に規定され、その上で被験者の反応として個体化したものである。したがって、そこにとどまったままでは、われわれは物象化的錯認に陥るのであり、反応があくまで非自己完結的で間主観的なスタイルを反映したものであることを、換言すれば、被験者とテストからなるそのつどの状況性を反映したものであることを見失ってしまうのである。

確かに、客観化されたロールシャッハ変数のレベルになると、統計学的に時間的安定性のある変数から非常に不安定な変数までの幅があることを、換言すれば、状況によって左右されない一貫した反応と状況依存的な反応があることを、検査——再検査研究によって明らかにすることができるであろう。しかし、客観化された変数は、生き生きとした相互交流が営まれる具体的現実を、つまり被験者の言語行為のゲシュタルトから放射するスタイルを捨象したものに他ならない。例えば、特殊評定である「逸脱言語表現 (deviant verbalization)」（Rapaport, D., 1968）はどうであろう。被験者の言語表現について「作話」や「相互関係づけ」などと評定し、それを「距離の喪失」や「距離の増大」として論じることができたとしても、個々の反応に即した個体化のスタイルについて具体的に描出するのは、容易なことではないのではあるまいか。

語る主体としての被験者は、テストとの間身体性のうちに生きているので、ということは

「言語活動を通して他者との関係のうちに存在している」ので、発話というものが「人がそれによって他者とのコミュニケーションを達成することのできる一つの全体的構造、一つのシステム」(Merleau-Ponty, 1988)であるかぎり、被験者の言語からは「そのゲシュタルトから放射する対人関係のスタイル」(Merleau-Ponty, 1969)を読み取ることが可能である。加えて、被験者の「言語行為の障害は、自分の身体や対人関係の障害に結びついている」(Merleau-Ponty, 1969)わけであるから、テストは、対人関係のスタイルだけでなくその障害をも、被験者の言語行為そのものに見て取ることができる。われわれは、そのようなスタイルや障害を、ある共同の具体的状況における関係性のうちに捉えねばならない。例えば「境界性人格障害」はかつてその人を虐待した誰かとの関係において、「バタード・ウーマン (被殴打女性)」は「バタラー (殴打者)」との関係において (田澤, 2001 a), というように。

被験者とテストのペアによって構成されたロールシャッハ状況にあらわとなる被験者の個体化のスタイルは、それがスタイルであればこそ、他の日常場面においても発見されることであろう。これが、ロールシャッハ・テストが検査法として成立する所以である。そして、その人の個別的なスタイルは、他の誰かのスタイルと相似しているかもしれない。さらには、同じスタイルが「ここ」にも「そこ」にも「あそこ」にも遍在し、時空を隔てた彼方 (過去) や文化の中にさえ発見されるかもしれない。

未完結の個体のスタイルは、共同体へと放射している。われわれは、根底に潜勢する普遍の本質であるところの前人称的な「根源的なひと (On primordial)」というあり方から、それを背景にして個別的かつ人称的な主体としての「誰」へと現勢的に個体化し、一般的で非人称的な「ひと (On)」というあり方へと拡散していく (Merleau-Ponty, 1960)。われわれの個体化 (個性化) は、人間的スタイルの統一性 (文化の統一性) としての一般性へと開かれているのであり、それによって、自然的世界における「自然的な一般性」から文化的世界における「創造された一般性」へと移行することが、「間世界 (intermondes)」(Merleau-Ponty, 1964) において可能となるのである。

XI. 結語

われわれは、一定の状況においてそのつど個体化することで生まれ、そのつど消滅していくわけであるが、そのつどの自己がもっぱら忘却の淵へと沈むわけではないとすれば、それは一体どのようにして自己の歴史性 (歴史的世界) と関連しているのであろうか? この疑問に対しては、そのつど個体化して消滅する自己は、生きられる身体それ自身へと、すなわち他者 (共同体・世界) に開かれた身体図式へと沈殿し、定着することで、個別性と一般性の統一体としてのスタイルないし人格の歴史性へと通じている、と答えることができるかもしれない。沈殿した歴史は、心身的に生きられている歴史として、身体図式から放射する各自的なスタイルの中で、人と人との「あいだ」であるこの今に現存しているのである。

ロールシャッハ・テストは、時間性格としてはあくまで一回的なものである。そこが、一回的な出会いを繰り返すような過程的性格のある心理療法とは、異なるところなのであろう。心理療法とは、スタイルの視点から言えば、その構造変化を目指し、治療者とクライアントとなるペアの間で営まれる、構造史としての個性化の過程であると表現できるのかもしれない。しかし、心理療法については、稿を改めて論じなければならない (田澤 [1994; 1995 b; 1996;

1997；1998 a；2000；2001 b；2002 a；2002 b；unpublished manuscript b] を参照されたい)。

〈付記〉 心理査定と心理療法は私にとって両輪のようなものであるのだけれども、本論は前者に関する私の到達点である。今後もロールシャッハ・テストの根本原理について、さらにこの線で探究していくつもりである。これまで心理臨床家として、病院と学校という異なる世界で活動してきたのであるが、札幌学院大学滝沢広忠先生、京都文教大学酒木保先生には、臨床上の暖かい御指導を賜り深謝いたします。また、北海道大学大学院教育学研究科・教育臨床心理学研究グループ田中孝彦先生、間宮正幸先生、葛西康子先生には、研究上の御指導を頂き、深く御礼申し上げます。

注釈

- 1) 本論は、松尾 (1990) のように人称的に表現すれば、主観的個性性である「誰」の上に立った「誰」以後の「誰にでも」すなわち客観的一般性から、その「誰」の根底に潜む「誰」以前の「誰にでも」、すなわち「誰」が「誰」として個体化するための普遍の本質 (根源的な前提基盤) へと回帰し、それ自体の構成を問うものである。
- 2) 事物がわれわれの前に図として浮かび上がってくるのは、ある領野を地にしてである。そして、その領野は、より大きな領野である外部地平を地に行っている。現象学的思惟においては、このような階層構造の究極的基礎が「すべての地平の地平」であるメタレベルの「世界」なのであるが (長滝, 1999), 本論がまずもって目指すのは、このような世界を地盤としてその上に階層的に構造化されたロールシャッハ状況を構成的に分析することである。
- 3) Katz, D. (1925) は、実験現象学の立場から、色の現れ方を「平面色 (film colours)」「表面色 (surface colours)」「透明平面色 (transparent film colours)」「透明表面色 (transparent surface colours)」「空間色 (volume colours)」「鏡映色 (mirrored colours)」「光沢 (lustre)」「光輝 (luminosity)」「灼熱 (glow)」などに分類している。われわれは、これまで形態反応、色彩反応、陰影反応などの分類に従ってきたが、このような Herman Rorschach 以来の伝統を断ち切って、Katz のような面と色の視点から決定因を再構築する必要があるのではなからうか。つまり、ロールシャッハ・テストそれ自体にとってではなく、われわれの知覚にとって自然な評定と分類を構築し、それに様々な知見を基づかせていくことで、新たな解釈世界が開けるのではないかということである。
- 4) Heidegger, M. (1927) は、用具的存在者の一契機としての原初的かつ実践的な空間について、「場所や場所の多様性は、事物が任意に客体存在する地点と解されてはならない。場所とは、そのつどある道具がそこに適しているとか、ここに適しているとかいう場合の特定の〈そこ〉や〈ここ〉のことである。……このように、用具的なものの占める多様な場所が方面という性格によって方向づけられていることこそが、環境内でもっとも身近に出会う存在者にそなわる〈身のまわりに〉という性格、つまり〈われわれの周囲に〉という性格をかたちづくるのである。三次元に展開される多数の可能的位置がまず与えられていて、それが客体的な事物によって満たされるというのではけっしてない。こうした空間の三次元性は、用具的なものの空間性にあってはまた隠されている。『上』は『天井に』であり、『下』は『床に』であり、『背後』は『戸口のそば』なのである。すべての地点が、日常的交渉の進行や進路によって発見され配視的に解意されているのであって、観察的な空間測量によって確定され記載されるものではないのである」と叙述している。用具的なものの空間は、キネステーゼ空間や「トポロジー空間」(Piaget, J., and Inhelder, B., 1948) に対応するのであろうが、ここで注目されるのは「空間の三次元性は、用具的なものの空間性にあってはまた隠されている」という箇所である。つまり、形式化された空間においてはパースペクティブな構図や事物の立体視が既成的に確立しているのであるが、このような原初的な様式の空間体験においては二次元平面が「方面 (Gegeng)」として現出するにとどまるのである。
- 5) ここでは身体性を空間との関連で叙述したのだけれども、例えば Wallon, H. (1983) の諸理論を援用することによって、身体性と情動との関連においてロールシャッハ理論を組み替えることが可能となるように思

われる。つまり、「筋トヌス」や「姿勢機能」といった「身体図式」に関する諸概念を「情動」と結びつけて、さらにそれをロールシャッハ・テストの「色彩」や「形態」との関連で論証するのである。情動、色彩、形態といった異なる諸概念を統一的に理解するためには、中村(2000)の「振動」「共振」「共鳴」「反響」「リズム」などの諸概念が役立つことになろうが、それについては今後の大きな課題である。それから、ここでは間身体性について叙述しているのだけれども、Goethe, J. W. v. (1953)の「すべてを自分で見たり体験したりしたということでもよい。しかしきみが他者とその話とを信用しようと思うのなら、これからは三者、つまり客体と二つの主体とでことをなさねばならぬということを考えておきたまえ」という言葉からは、当時(初出は1829年の『ヴィルヘルムマイスターの遍歴時代』)まだ「間主観性(inter-subjectivity)」「共同主観性(co-subjectivity)」「超主観性(trans-subjectivity)」などの諸概念が知られていなかったにもかかわらず、彼がまさにその点を見据えていたことが理解されるであろう。

- 6) ロールシャッハ・テストにおいては、このような有機的体制化が欠如していたり、十全に作動しない場合には、「インクで描いたただの染み」とか「お化け」ということになるであろう。これらは結局のところ「何も見えない」ということであるから、換言すれば「〈として〉のない把握」ないし「端的に了解しつつ見ることの欠如態のひとつ」(Heidegger, M., 1927)ということであるから、光のもやである「雲」という表現(Gibson, J. J., 1977)もこれに加えることができるのかもしれない。われわれは、前述語的経験の次元における、何とも名状のしようがない未知のものに対してすら、言語活動を介在させることによって「何かしもあるもの」として規定することができるのである。また、辻(1997)の言う「具象しぱり」は、アスペクトのひらめきの可能性が欠如して、ひとつのアスペクトしか捉えることのできない「アスペクト盲」(Wittgenstein, L., 1967)と考えることが可能である。
- 7) 図と地の分節には様々な仕方がある。通常考えられるのは、地の「上に」図が分節化して、境界線が閉合した上で外輪郭線として図の側に属するというものであろう。次に考えられるのは、境界線そのものが図化される現象である(Metzger, W., 1953)。ロールシャッハ反応としては、一次的空白反応や外縁反応などが考えられるであろう(田澤, 1999b)。そして、後に同位化の機制として叙述するが、図と地(面と面)が横並びに等置されて、境界線が互いの裏面として共有されるような現象もある。
- 8) 側生的な網状組織の活動性は、Husserl, E. (1939; 1966)の「受動的綜合(passiven Synthesis)」ないし「原連合(Urassoziation)」に符合するであろう。原連合とは、新田(1995)によれば、意味内容の上で互いの同質性と異質性に基いて融合したり、対照化を引き起こしたりするような、意味の受動的な自己構造化のことである。例えば、赤い円と赤い三角とは色の点では同質であり、互いに融合して「対化(Paarung)」を引き起こすが、形の点では異質であり、対照化を引き起こすことになる。このとき初めて色と形が意味の上で区別されてくるのであり、すでにここに一般的な意味が誕生するのである。
- 9) Vygotsky, L. S. (1962)は、子供における「一般的名称と具体的名称の発達の交互性」について、以下のように叙述している。すなわち「概念形成の過程は、二つの方向から——一般の側からと特殊の側から——ほとんど同時に、発達する。(改行)このことのきわめて重要な確証は、子供が使用する最初のコトバは、実際に、一般的記号であり、比較的のちになってはじめて特殊的・具体的記号が子供に発生するという事情である。子供は、確かに、個々の花の名前より先に『花』というコトバを習得する。子供の言語発達のある条件から、何かの特殊的名称を先に習得することがあったとしても、そして『花』よりも先に『バラ』というコトバを知ったとしても、子供はこのコトバを使ってバラだけでなく、すべての花をよぶ。つまり、子供は、この特殊的記号を一般的記号として使う」である。これは、幼児のロールシャッハ反応に見られる、Klopfer, B., Spiegelman, M., and Fox, J. (1956)の“magic wand perseveration”なる現象に照応するのであろう。

また、例えば、赤い絵の具で描かれた犬は幼児にとっては「赤い犬」なのであろうが、ロールシャッハ・テストにおいて類似する現象に、「強制形態色彩反応」という分類が存在している。通常であれば、その反応概念にとって不自然な色は捨象されるはずであるが、ここではそれが捨象されるに至らないのである。Cassirer, E. (1923; 1925; 1929)は、色と空間(形態)との関連または平面色から表面色への移行について「ある個別的な色の印象がその属している色の類を表出するだけでなく、それがそれ自体としてはまったく異質なものの、つまり物の規定と空間的規定とを表示する手段として働くようになるときには、われわれは表示のある新たな次元に到達することになる。色という質そのものがいまや、その付着しているその担い手、

つまりある持続的基体を指示する単なる〈偶有性〉になるのだ。意識がこうした『指示』なりこの種の『理念化』なりに従うようになるやいなや、それとともに色そのものも意識にとって、純粹に直観的な体験としていわばある別の光のもとに現れてくることになる」と叙述しているが、強制形態色彩反応に見られる色の体験は、個別的な色の印象が偶有性へと展開しきっていないのである。類似する反応に「任意形態色彩反応」があるが、ここに見られる色の体験は「照明によって対象に〈偶然〉付着している質」としての色が言語化されたものなのであろう。

- 10) 本論は、市川(1990)の言葉で言えば、身によって見える世界を分節化する(あるいは世界によって身自身が分節化される)知覚的「身分け」から、言語的に世界を分節化する「言分け」への移行について叙述しているのだけれども、言語が知覚的身分けに深く浸透してその仕方を左右しているのは言うまでもあるまい。後に「翻訳関係」として叙述するが、身分けと言分けは入り交い、循環しているのである。
- 11) Cassirer, E. (1923; 1925; 1929) によれば、われわれの表現運動としての言語は、「身振り言語」と「言葉の言語」に大きく分けられる。本論で叙述するのは、主として言葉の言語についてである。

これらは、いずれも情動を表現するための未分化な感情音声から概念を表現するための分節化された音声言語へ、自発性が遮断された外的印象の反復としての模倣の身振りから能動的な指示的身振りや描出の身振りへと、発達の展開していく。つまり、内的緊張や感受されたものの放出という直接的かつ感性的な原初的機能の段階から、自発的な表現運動の段階へと、さらにはそのような身体的な行為から言語それ自体による観念的な行為へと、展開していくのである。しかしながら、身振り言語と言葉の言語は緊密に結びついており、発達の言っても、音声は模倣運動の全体から切り離されるのは極めて緩慢である。発達の比較的高次の段階においても、音声は模倣の全体のうちに埋没していることは、成人の挙動にも示されているであろう。

ロールシャッハ状況においては、シンボルとして用いられる言語音声以前の未分化な感情音声として、「擬音語」や「擬態語」あるいは「感嘆詞」や「間投詞」などが表出されることがある(これに関する認知心理学的研究として苧坂[1999]がある)。これらは、プロットを認知した際にある強烈な瞬間的印象が与えられ、そこから引き出された、個別的な感動や興奮の音声である。したがって、秩序を持って分節化した音声言語のように、行為の連関がそれに映し出される音系列であるとは言えない。Cassirer, E. (1923, 1925, 1929) は「個々の感覚印象は、その単なる経験的類似性とか経験的継起や共在といった諸関係とかによって互いに外的に結合されるのではなく、それぞれがシンボルとして表出している統一的对象という共通の媒体によって、統合され、ひとつにされるのである」と叙述しているのだけれども、例えば「二人で荷物を持ち上げているように見える」のようなP反応であれば、身体性と密接不可分である未分化な感情音声(さらに平面上の位置的な共在を意味する「向き合ってる」という表現)そのものが地化され、それを下部構造として、「二人で持ち上げる」という統一的な動作にゲシュタルトが構造化されと考えられるのである。

未分化な身体運動としては、「緊張放出の身振り」「指示的身振り」「模倣の身振り」「描出の身振り」などが見られることがある。「緊張放出の身振り」は、プロットによって触発された逼迫感を払い落とすために、頭を左右に振ったり、図版を投げつけるように置いたり、口を抑えたり、などすることである(例えば, Binswanger, L. [1957] の事例ユルク・ツェントに顕著に認められる)。「指示的身振り」は、「ここが手で、足で」という反応の説明の際に伴われる「指さし」や、言語化できない力動感を説明するために呻吟しながら指先で図版をなぞることなどである。後者は、感性的かつ身体的に対象を把握する、感性的な指示作用である。特定の形状を一つ一つなぞることは、情動や衝動の原初的段階で対象を把握すること、すなわち直接的に掴み取ろうとすることに他ならない。ここでは、身体(指先)と図版が癒合していて、感性的直接性のうちに直接それを手で掴もうとしているのである。「描出の身振り」は、「共鳴動作(co-action)」(Werner, H., and Kaplan, B., 1963)である「模倣の身振り」から区別することがしばしば困難であるが、プロットに認知された運動感や形状を説明する際に、被験者が身体でその動きやかたちを模写して再現することである。描出の身振りには感性的かつ直観的な明確さがあり、説明を受ける検査者にとっては理解しやすい。しかし、動きや形状を直接的に再現しようとするわけであるから、一つ一つの動きがばらばらな空間的形象に分割されてしまい、分節化された音声言語のように、一つの反応のうちで個別的な運動の位相が機能的な全体として統合されていない。つまり、被験者が描出の身振りをする際には、表現すべき対象や運動感が直接的に模写されているのであって、外的印象やその諸特性にとらわれたまま間接化が果たされていないのである(間

接化しようとする試みと表現することも可能である)。

- 12) Rapaport, D. (1968) は、逸脱言語表現のひとつである「作話」の特徴として「流動性」をあげている。この流動性をアスペクトの視点から言えば、多様なアスペクトがひらめくばかりで、恒常的な見えが獲得されない(結局のところ何も見ていない)現象として理解されるであろう。あるいは、焦点の確立を持続させることなく流動的に向け変えられる注意のために、目まぐるしいゲシュタルト変換すなわち再構造化が連続して、ゲシュタルトを時間空間的に固定化して定位することが困難であると言えるであろう。理想的には、個々の反応毎にゲシュタルト変換が生起するはずであるが、作話では、目まぐるしいゲシュタルト変換によって(反応間ではない)反応内において再構造化が連続しているために、主題が一義的に決定されないのである(辻 [1997] の言葉で言えば「着想の終結」が困難であるということ)。Goldstein, K. (1934) は「あらゆる変換と一義性の欠如とは、生体がまだ最適なる環境を発見しえないことの表現である」と叙述しているが、流動性は、主題としての図を図たらしめる安定性のある静止した地が欠如していることを意味しているであろう。そのようなわけで、アスペクトがひらめくばかりの「作話」と、アスペクト盲を意味する「具象しぱり」は、両極的な現象として規定することが可能である。
- 13) テスターは決定因を評定するために「いかにしてその反応が出てきたのか」について知る必要があるのだけれども、直接的に「どうして」あるいは「何が原因で」そう見えるのか質問したとしても、被験者は解答不能であるに違いない。というのは、Ryle, G. (1954) が叙述しているように、動詞「勝つ」のように機能する動詞「見える」は「状態」や「過程」や「結果」ではないのであって、被験者にとっては「それがまだ見えないか、あるいはすでに見えてしまっているか」を、つまり何も見えないか、あるいは何かに見えたのかを意味するに過ぎないからである。したがって「どうして」と問われた被験者は困惑するか、あるいは「そう見えたのだから仕方ない」としか答えようがないであろう。われわれテスターが質問段階において被験者に提示することを求めるのは、直接的には反応の構造についての説明、換言すれば、その反応全体の構造を成立させている部分と部分との関係の仕方やそれらの諸性質についての説明である。例えば、反応が人物像であれば、頭部や胴体や手足といった諸部分をひとつの全体構造へと統合すること、すなわち「ここが手で、足で、……」という具体的な説明を求めるのである。そして、このような構造についての説明の中に色彩や陰影の関与を示唆する表現が存在しなければ「形態反応」と評定され、それらの関与を示唆する表現が存在すれば「色彩反応」や「陰影反応」などと評定されるのである。初心のテスターに至っては「どうしてそう見えたのですか。色ですか、形ですか」と問うことがあるが、例えばプロットがコウモリに見えたとして、「色は関係ない」や「色も関係しているのかも」と答えることは可能であろうが、そう見えたのは色が原因なのか、それとも形が原因なのかなど、そもそも答えようがないのである。厳密に言えば、われわれは Goethe, J. W. v. (1810 a) とともに「眼は形など見ないのだと主張したい」。というのは「明と暗と色彩とが一体になることによって初めて、対象と対象を、また一つの対象の部分と部分をたがいに区別することが眼にとつて可能になるから」である。
- 14) 例えば、Ⅲ図版に対するWの顔反応も参考になるであろう。すなわち「顔。[男の人の怒った顔。目が釣り上がってて、これ(d1)が目で、これ(D1)が何かこう怒ってるような、血管が浮いてるような。(他は?) このへん鼻で(D3)、輪郭ないですね。ぜんぶ顔の中身。髭生やしているような(P反応の腕の部分)、ここ]」である。
また、顔反応ではなく「目」のみ認知する反応については、ある肖像画を前にして驚愕反応を示した猿に対する Cassirer, E. (1923; 1925; 1929) の意味づけが参考になるであろう。すなわち「その絵は一人の人間の肖像として見られているのではなく、その絵のなかから表情にかかわる特定の特徴だけが捉えられているのである。ここで働いているのは、〈眼らしきもの〉そのものについての相貌的な体験なのであり、この体験は、ある人間の顔を認知することも、また眼をこの顔の『一部』として認知することも前提にしているわけではない」である。
- 15) 同様の事態について、Arnheim, R. (1954) は、絵画における平面と奥行の相互作用を叙述する中で、絵画と音楽というふたつの芸術の発達に平行関係を指摘し、「音楽では、はじめに和『声』が歌われ、次に独立したメロディが同時に歌われるが、それはしだいに『垂直』構造のほんとうに新しい次元に育っていく。ひとたび、これが出来上がると、各音はメロディのなかでひとつの位置を占めるとともに、同時にひびく音によってつくられる和音のなかでもひとつの位置を占めることになるから、ふたつの文脈に属するわけである。ふ

たつの構造次元が統合されたとき、複雑な近代の多声音楽が生まれた。同様に、絵の情景ははじめは別々の水平の列あるいは断片に分かれていたが、次第にひとつに統合された、三次元の全体に融合されたのである。ここでも、統合が出来上がると、各要素はふたつの異なった文脈に属するわけである。それは平面のどこかに位置していると同時に、絵に表現された三次元の空間のどこかに位置している。したがって、絵画の各部分はふたつの形をもっている。ひとつは三次元の形であり、もうひとつは平面に投射された形である。絵画の全体はふたつのまったく異なった構図から成り立っている。ひとつは奥行のある舞台上の配列で、もうひとつは平面の配列である。このふたつを総合したものが全体の意味を構成する」と叙述している。

- 16) 例えば、ふたつの面が同時に認知された反応として、Ⅸ図版に対する「水晶の玉の占いに使うような、その中に映ってるもの(W)。(ここ(オレンジ部分の突起)がちょっと線入ってて、マルの一部分のような。あとモヤモヤッとしてるから、色も何かそうで、わけの分からないような。(?)ここ(オレンジ部分の突起)に輪郭あるから、こうなるけど(プロット周囲の空白領域を指先で円形に区切る)、映ってるってういか)」がある。Wittgenstein, L. (1977) が言うように「(159) 滑らかな白い面にもものが映り、するとその像はその面の背後にあるように見え、ある意味でその面を通して見られることがある」わけであるが、ここでは図版の紙面が水晶玉の表面として、その奥にプロットの面が「もの」として、それぞれが二重性のうちに知覚されているのである。「映る」という表現は、通景反応のように常に画像表面の「背後」を意味しており、「透明であることと鏡のような輝きは視覚像がもつ奥行き次元にのみ存在する(19)」(Wittgenstein, 1977) わけであるのだけれども、高次の構造におけるような画像表面の上に図が浮き立つものとは対照的に、ここでは白地が現勢化した上に図の浮沈が反転していると言えるであろう。
- 17) 低次の構造と高次の構造を空間論の視点から言えば、前者は二次元的な「平面体」として、後者は三次元的な「立体」として、それぞれ規定することができる。平面体として構造化されているのか、立体として構造化されているのか、あるいはどちらの特徴が顕著であるのかに注目することで、反応の構造化の度合いについて判断することが可能となる。Arnheim, R. (1954) は「子供は上下を区別するには、垂直次元を利用することができるし、左右を区別するには、水平次元を利用することができる。そうすると、私が『垂直空間』(正面図)と呼ぶものができる。また子供は二つの次元を、平面図における羅針盤の方向を示すために使うこともできる。これが『水平空間』である。人物、樹木、壁、机の脚など、立っているものは鮮やかにくっきりと、垂直空間に現れる。これに対し、庭、街路、机の表面、皿、敷物などは水平空間を必要とする」と叙述しているが、基本的には、垂直空間＝立体＝高次の構造、水平空間＝平面体＝低次の構造という、対応関係を考えることができる。

反応は(基本的に)立体的な「正面図」「側面図」「背面図」「立面図」や、平面的な「断面図(スパッと切った)」「鳥瞰図(上から見た)」「仰視図(下から見た)」「地図」などに分類可能であるが、認知心理学の視点(天ヶ瀬, 1994)から言えば、前者は地上での環境の配置に対する視点から抽出される「遠近法情報」であり、後者は、環境の配置を上空から(あるいは上空を下方から)見たかのような「地図情報」が抽出される。林部(1995)は「一般的には、水平視差から垂直視差に移行するに伴い、立体効果は減弱し、完全な垂直視差では立体は出現しない」と叙述しているが、左右対称な鳥瞰図や仰視図は押しつぶされたもののように見えやすく、立体性が平面的なものに引き伸ばされてしまう傾向があるのである。

Wittgenstein, L. (1977) は「(53) ジグソーパズルを、そのピースを記述することによって記述する。私が思うに、これらのピースを見てもわれわれには立体的な形は決して予想できず、単色あるいは多色からなる平面的な断片として見えるのである。そしてそれらが組み立てられてはじめて、『影』や『光沢』や『凹凸のある単色の面』等々、といったものとして姿を現す」と叙述しているのだけれども、全体像(全身像)ではない部分像は、それがたとえ正面図ないし立面図であったとしても、平面的な断片ないし断面として認知されやすく、図と地の分節は不十分なものである。また、例えば、側面図であり立面図でもあるようなマントなどを着た人物像は、確かに立体の表現ではあろうが、マントが立体の外側(表面)の二次元平面の表現にもなっており、このような反応では平たいと深い関係が未分化なままで、双方がモザイク状に結合されたものとして理解されるであろう。

平面体から立体への移行、つまり低次の構造から高次の構造への移行は、子供の描画行動の発達にも顕著に認められるものであるが(Thomas, G. V. and Silk, A. M. J., 1990), それは原初的な様式の空間体験から形式化された空間へと、単なる空間性から体系的空間へと、「行動空間」または「活動空間」から「表象空間」

または「表示空間」へと移行し、「ただの行為空間が視空間となり、行動圏が視界となる」(Cassirer, E., 1985)過程でもある。平面体(低次の構造)においては、二次元的配置を規定する枠組が背景に地として布置され、図版の紙面そのものが直接的に反応の基底となる(つまり図版の紙面が反応の基底面と一致する)のだけでも、ここでは自己身体(キネステーズ)に中心化された空間定位が優勢となり、自己が定位の基準となる。換言すれば、視空間の空間枠組が、定位の基準としての機能を失った状態である。一方、立体(高次の構造)においては、三次元的配置を規定する枠組(図版の紙枠[四辺]すなわち整合的な関係系)が背景に地として布置され、視空間の空間枠組を基準として反応が定位されるので、視覚による空間定位が優勢となり、反応の垂直方向と水平方向が図版の四辺と一致した反応が表出されることになる。これらは、中村(1979)の言う「体性感覚的統合」と「視覚的統合」に対応し、筆者が以前「受動的知覚モード」と「能動的知覚モード」として叙述したものであるが(田澤, 1995 a), 両者は「視空間が未分化で不安定な場合には自己中心的定位がみられ、視空間が安定をとりもどすとき、それが定位の基準となって自己の定位を規定する」(中村, 1979)という、弁証法的統合構造をなしていると考えられる。

反応の構造については、空間論だけでなく時間論の視点からも検討すべきである。Husserl, E. (1954)は、知覚野の射映的な面性について、以下のように叙述している。すなわち「事物は、同時的、現実的に知覚された事物の全群の中の一つであるが、この群はわれわれにとつての意識としては世界そのものではなく、その群の中に世界が自己を表出するのである。群はわれわれにとつての瞬間的な知覚の領域として、つねにすでに世界『の』切断面、すなわち可能的知覚の事物の宇宙から切り取った一部という性格を持っている。ゆえにそれは、そのつど現在の世界なのであり、世界はそのつど、わたしにとっては『原初的現在』を核とし、そのまわりに内的および外的な地平が妥当していることによって、世界はみずからを表出する」である。周囲世界は身体運動によってそのつど構造化され、目下の位相は連続的に刻々変化しているのだが、ここで注目されるのは、瞬間的な知覚の領域としての「切断面」という箇所である。立体ではない平面体は身体運動を介して体験されるそのつどの射映の面性に対応していると、したがって反応に露呈する面性はそのつど活動することによって転換していくキネステーズ空間ないし身体性と相即していると考えられるのだけれども、低次の構造には(持続ではない)瞬間すなわち瞬時性という特性のあることが理解されるであろう。その意味で、「グシャ」「パッと」「サッと」「ドッカン」などの副詞的音声表現の付帯する反応は、運動様態が瞬時的であり、平面体として構造化されたものである。瞬時性=平面体という時間論の詳細については、重要ではあるが、稿を改めて論じなければならない。

- 18) 図と地は反転するので、その区別は絶対的なものではない。以下に図と地の反転現象について、Cassirer, E. (1923; 1925; 1929)とMerleau-Ponty, M. (1945)を参照して、色の視点から叙述する。

表面色として現勢化する図と平面色として潜勢化する地は、視野の構造転換を通して反転する。色の現象が受け取られる視点やそれが眺められる局面が変われば、それまで表面色と見なされ、そのようなものとして特定の对象的な担い手(持続的基体)に関係づけられ秩序づけられてきた現象は、単なる平面色の現象に転換されることによって、色の現象の相貌全体が一変してしまう。例えば、風景の色は通常の直立した姿勢で見ると、股の間から逆さまに見るほうが、はるかに輝いてはっきり際立ってくる。その際には風景は平板な像となり、色も遠近の対象へのその関係を失ってしまうことになる。また、画家が目をすばめることによって得る色は、もはや対象としての色すなわち壁の色とか紙の色ではない。それには対象としての厚みもないわけではないが、虚構された同じ平面の上に漠然と位置している着色された表面なのである。色の現象がある色の秩序から他のそれへと移行する際に起こる、こうした特有の転換の原因になっているのは、基準点の変化に他ならない。つまり、ある一定の色を担っているものがこうした基準点と見なされている場合には、恒常的な対象である持続的基体には恒常的な色が持続的属性として帰属せしめられ、反対に、分析的な態度によってもっぱら対象の持続的な色だけを視向するようになると、色の現象の様相は一変してしまう。平面色のように性質と分離された感官的経験が生じるのは、視覚のこうした全面的構造化が破壊されるときなのである。

- 19) 両手を合わせることで、すなわち合掌は、Deleuze, G., and Guattari, F. (1991)によれば、彩色された諸平面の接合と切断に喩えることが可能である。彼らは「偉大な画家たちには、たしかに、二つの徴がある。……ひとつは、彼らが、色に接近し、その中に入っていくときの、ほとんど恐怖に近い敬意であり、ひとつは、彼らが、いくつもの部分面あるいは平面の接合——深き=奥行きのタイプはそれに依存している——を

遂行するときの、入念さである。……難しいのは、〔Merleau-Pontyにおけるように〕両手を合わせることでなく、平面を接合することであり、いくつかの平面を接合して張り出しを作ること、あるいは反対に、いくつかの平面をへこませること、切断することである」と叙述している。

- 20) この概念についての哲学的な解説としては、廣松・港 (1983)、木田 (1984)、鷺田 (1997)、長滝 (1999) などがある。本章はこれらに負うところが大きい。ちなみに、Goethe, J. W. v. (1810 b) は、このスタイル＝様式について「結局のところ、自分のものばかりではなく他人のもの、自然の手から直接に受け取ったものばかりでなく先人から間接に受け取ったものを、ともによく消化して、卓越した個性を形成するための養分にできるなら、いつでも世界の人々のために大きな利益を生み出すことができるだろう。これが迅速かつ強力におこなわれると、そこから〔自己と他者との〕和合が生まれるにちがいない。芸術で〔様式〕と呼びならわされているものがそれであり、そうすると、正しいもの、真なるものについて個性と個性はますます接近するようになるだろう。そしてそうならば、他の人々とは違った〔自分の〕風変わりな特徴を戯画風に強調しようとする場合よりも、個性のすばらしさがはるかに浮かび上がり、世間から大事にされるにちがいない」と叙述している。
- 21) スタイルの持つ第二の媒介機能は、身体と世界を媒介することにある。つまり「世界に対するわれわれの本源的な関係」(Merleau-Ponty, 1969) として、世界と身体との接触点にスタイルが出現するのである。個人の統一性に独自のスタイルがあるように、世界も独自の統一性を持って出現するわけであるが、互いのスタイルは呼応し合っていると言える。例えば、世界が持つ最も一般的なスタイルは時間と空間であろうが、それと表裏をなすようにして、われわれの身体は知覚——運動的な主体なのである。新田 (1995) が言うように、時間と空間は世界の原秩序としての世界内部的な事物の個体化の原理として働き、それと同時に個体が個体として時間空間的な位置システムに配置されることによって、世界の現実性連関が形成されていく。スタイルは様々な次元で考えることができるのだけれども、世界とはあらゆるスタイルがそこから生み出される「すべてのスタイルのスタイル」(Merleau-Ponty, 1945) であると言えるであろう。

文献

- 秋谷たつ子 (1990) 図形テストと非構造的テスト——投映の理解と臨床マナー。異常心理学講座Ⅷテストと診断、みすず書房。pp. 307-340.
- 天ヶ瀬正博 (1994) 環境・地図・遠近法・定位。イマージュ, 5 (2), 143-153.
- Arnheim, R. (1954) *Art and Visual Perception: A psychology of the creative eye*. University of California Press, Berkeley. 波多野完治, 関計夫訳 (1964) 美術と視覚——美術と創造の心理学。美術出版社。
- Binswanger, L. (1957) *Schizophrenie*. Neske, Pfullingen. 新海安彦, 宮本忠雄, 木村敏訳 (1960, 1961) 精神分裂病 I, II。みすず書房。
- Boehm, G. (1978) *Zu der Hermeneutik des Bildes*. 新田義弘, 村田純一編訳 (1986) 現象学の展望。国文社。
- Cassirer, E. (1923, 1925, 1929) *Die Philosophie der symbolischen Formen*. Bd. I. Die Sprache., Bd. II. Das mythische Denken., Bd. III. Phänomenologie der Erkenntnis. Bruno Cassirer Verlag, Berlin. 生松敬三, 木田元, 村岡晋一訳 (1989, 1991, 1994, 1997) シンボル形式の哲学 (第一巻言語, 第二巻神話的思考, 第三巻 [上] 認識の現象学, 第三巻 [下] 認識の現象学)。岩波文庫。
- Cassirer, E. (1985) *Symbol, Technik, Sprache*. Felix Meiner Verlag, Hamburg. 篠木芳夫, 高野敏行訳 (1999) シンボル・技術・言語。法政大学出版局。
- Deleuze, G., and Guattari, F. (1991) *Qu'est-ce que la philosophie?* Minuit, Paris. 財津理 (1997) 哲学とは何か。河出書房新社。
- Gibson, J. J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company, Boston. 古崎敬, 古崎愛子, 辻敬一郎, 村瀬曼訳 (1985) 生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る。サイエンス社。
- Goethe, J. W. v. (1810 a) *Zur Farbenlehre I*. 高橋義人, 前田富士男訳 (1999) 色彩論——I 教示篇・論争篇。工作舎。
- Goethe, J. W. v. (1810 b) *Zur Farbenlehre II*. 南大路振一, 嶋田洋一郎, 中島芳郎訳 (1999) 色彩論——II 歴史編。工作舎。
- Goethe, J. W. v. (1820) *Entoptische Farben*. 石光泰夫訳 (1985~1989) 内視的色彩。モルフォロギア——ゲー

- テと自然科学。7, 80-93: 8, 83-91: 9, 84-92: 11, 76-83。
- Goethe, J. W. v. (1953) *Maximen und Reflexion*. 岩崎英二郎, 関楠生訳 (1980) 箴言と省察。ゲーテ全集 13。潮出版社。p.201-414。
- Goldstein, K. (1934) *Der Aufbau des Organismus*. Nijhoff. 村上仁, 黒丸征四郎訳 (1957) 生体の機能。みすず書房。
- Gurwitsch, A. (1966) *Studies in Phenomenology and Psychology*. Northwestern University Press, Evanston.
- Habermas, J., and Luhmann, N. (1971) *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt. 佐藤嘉一, 山口節郎, 藤沢賢一郎訳 (1987) 批判理論と社会システム理論。木鐸社。
- Hanson, N. R. (1969) *Perception and Discovery-An Introduction to Scientific Inquiry*. Freeman, San Francisco. 野家啓一, 渡辺博訳 (1982) 知覚と発見。紀伊國屋書店。
- 林部敏吉 (1995) 心理学における三次元視研究。酒井書店。
- Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*. 細谷貞雄訳 (1994) 存在と時間 (上, 下)。ちくま学芸文庫。
- 廣松渉 (1972) 世界の共同主観的存在構造。勁草書房。
- 廣松渉 (1979) もの・こと・ことば。勁草書房。
- 廣松渉 (1982) 意味と存在。岩波書店。
- 廣松渉, 港道隆 (1983) *メルロ＝ポンティ*。岩波書店。
- Husserl, E. (1939) *Erfahrung und Urteil*. Felix Meiner, Hamburg. 長谷川宏訳 (1975) 経験と判断。河出書房新社。
- Husserl, E. (1954) *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. Husserliana Bd. VI. 細谷恒夫, 木田元訳 (1974) ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学。中央公論社。
- Husserl, E. (1966) *Analysen zur passiven Synthesis*. Husserliana Bd. XI. 山口一郎, 田村京子訳 (1997) 受動的綜合の分析。国文社。
- 市川浩 (1990) 〈中間者〉の哲学——メタ・フィジックを超えて。岩波書店。
- 市川浩 (1992) 精神としての身体。講談社学術文庫。
- 片口安史 (1987) 新・心理診断法。金子書房。
- Katz, D. (1925) Translated by R. B. MacLeod and C. W. Fox (1935) *The World of Colour*. Kegan Paul, London.
- 木田元 (1984) *メルロ＝ポンティ*の思想。岩波書店。
- Klopfer, B., Spiegelman, M., and Fox, J. (1956) The interpretation of children's records. In: Ed. by B. Klopfer: *Developments in Rorschach Technique: Vol.2. Fields of Application*, Harcourt Brace Jovanovich, New York, pp. 22-44.
- Langer, S. K. (1957) *Philosophy in a New Key: A study in the symbolism of reason, rite, and art*. Harvard University Press. 矢野萬里訳 (1960) シンボルの哲学。岩波書店。
- Lombardo, T. J. (1987) *The Reciprocity of Perceiver and Environment-The Evolution of James J. Gibson's Ecological Psychology*. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale. 古崎敬, 境敦史, 河野哲也監訳 (2000) ギブソンの生態学的心理学——その哲学的・科学史的背景。勁草書房。
- 松尾正 (1990) 誰にでも——精神療法的な陥落と現象学。木村敏, 松下正明, 岸本英爾編 (1990) 精神分裂病——基礎と臨床。朝倉書店。pp. 626-636.
- Merleau-Ponty, M. (1942) *La structure du comportement*. Presses Universitaires de France, Paris. 滝浦静雄, 木田元訳 (1964) 行動の構造。みすず書房。
- Merleau-Ponty, M. (1945) *Phénoménologie de la perception*. Gallimard, Paris. 竹内芳郎, 木田元, 宮本忠雄訳 (1967, 1974) 知覚の現象学 1, 2。みすず書房。
- Merleau-Ponty, M. (1951) *L'Œil et l'esprit*. Gallimard, Paris. 滝浦静雄, 木田元訳 (1966) 目と精神。みすず書房。
- Merleau-Ponty, M. (1957) *Le concept de nature*. Résumé de cours, 中山元編訳 (1999) *メルロ＝ポンティ・コレクション*。ちくま学芸文庫。

- Merleau-Ponty, M. (1960) *Signes*. Gallimard, Paris. 竹内芳郎監訳 (1969, 1970) シーニュ1,2. みすず書房。
- Merleau-Ponty, M. (1964) *L'visible et l'invisible*. Gallimard, Paris. 滝浦静雄, 木田元訳 (1989) 見えるものと見えないもの。みすず書房。
- Merleau-Ponty, M. (1969) *La prose du monde*. Gallimard, Paris. 滝浦静雄, 木田元訳 (1979) 世界の散文。みすず書房。
- Merleau-Ponty, M. (1988) *Merleau-Ponty à la Sorbonne, résumé de cours 1949-1952*. édition Cynara. 木田元, 鯨岡峻訳 (1993) 意識と言語の獲得 — ソルボンヌ講義 I。みすず書房。
- Metzger, W. (1953) *Gesetze des Sehens*. Waldemer Kramer, Frankfurt. 盛永四郎訳 (1968) 視覚の法則。岩波書店。
- 長滝祥司 (1999) 知覚とことば — 現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い。ナカニシヤ出版。
- 中村雄二郎 (1979) 共通感覚論 — 知の組みかえのために。岩波書店。
- 中村雄二郎 (2000) かたちのオディッセイ — 中村雄二郎著作集 [第二期] I。岩波書店。
- 新田義弘 (1995) 現象学と近代哲学。岩波書店。
- 芋坂直行編著 (1999) 感性のことばを研究する — 擬音語・擬態語に読む心のありか。新曜社。
- Panofsky, E. (1924,1925) *Die Perspektive als "symbolische Form"*. Vorträge der Bibliothek Warburg. 木田元監訳 (1993) 〈象徴形式〉としての遠近法。哲学書房。
- Piaget, J., and Inhelder, B. (1948) Translated by F. J. Langdon and J. L. Lunzer (1956) *The Child's Conception of Space*. Rotledge, London.
- Rapaport, D., Gill, M., and Schafer, R. (1968) *Diagnostic Psychological Testing*. International Universities Press, New York. 田澤安弘抄訳 (1993) 言語表現の分析。非売品。
- Ryle, G. (1954) *Dilemmas*. Cambridge. 篠澤和久訳 (1997) ジレンマ — 日常言語の哲学。勁草書房。
- Saussure, F. (1916) *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Lausanne et Paris, Payot.
- Schafer, R. (1954) *Psychoanalytic Interpretation in Rorschach Testing*. Harcourt Brace Jovanovich, New York.
- Schachtel, E. G. (1966) *Experiential Foundations of Rorschach's Test*. Basic Books, New York.
- Shapiro, D. (1965) *Neurotic Styles*. Basic Books, New York.
- Shapiro, D. (1977) A perceptual understanding of color-response. In: Ed. by M. A. Rickers-Ovsiankina: *Rorschach Psychology* (second edition). Kreiger, New York, pp. 251-301.
- 田澤安弘 (1994) アリストテレス倫理学について — 心理学的及び精神病理学的断章。旭川精神衛生, 59, 18-23.
- 田澤安弘 (1995 a) 心的距離の観点から見た精神分裂病 — ロールシャッハ・テストを媒体として。臨床精神病理, 16 (3), 287-303.
- 田澤安弘, 木本幹則 (1995 b) 治療グループとしての人形劇の実践。日本集団精神療法学会発表論集所収。
- 田澤安弘 (1996) 集団精神療法への内観法の導入 — アルコール依存症者を対象とした治療効果の検討。アルコール依存とアディクション, 13 (1), 74-80.
- 田澤安弘 (1997) 夢, 箱庭, 描画を媒体としてみた個性化過程 (ユングの『転移の心理学』) の展開 — 学校の中で苦悩する教師を事例として。日本心理臨床学会発表論集所収。
- 田澤安弘 (1998 a) アダルト・チルドレンにみられたベルソナ分裂の病態構造に関する検討。アディクションと家族, 15 (1), 74-83.
- 田澤安弘 (1998 b) 複雑性 PTSD のロールシャッハ・テスト。北海道心理学会発表論集所収。
- 田澤安弘 (1999 a) ロールシャッハ・テストからみた外傷体験の後遺症について。アディクションと家族, 16 (3), 386-404.
- 田澤安弘 (1999 b) 横顔反応に関する検討 — 空白反応と外縁反応との関連において。心理臨床学研究, 17 (5), 417-429.
- 田澤安弘 (2000) 複合型 PTSD の箱庭療法。アディクションと家族, 17 (3), 300-314.
- 田澤安弘 (2001 a) バタード・ウーマンを暴力と支配から救うには — ロールシャッハ・テストからみた考察。

- 治療の聲, 3 (2), 241-258。
- 田澤安弘 (2001 b) 痛みと心理療法 — ウィトゲンシュタインの言語ゲームとの関連において。心理臨床学研究, 19 (4), 353-364。
- 田澤安弘 (2001 c) 特定不能の解離性障害とロールシャッハ・テスト。アディクションと家族, 18 (4), 550-569。
- 田澤安弘 (2002 a) ゲーテと心理臨床 — ゲーテ自然科学の批判的継承。北海道大学大学院教育学研究科 教育臨床心理学・臨床教育学研究グループ紀要, 教育臨床心理学研究, 4, 117-131。
- 田澤安弘 (2002 b) 研究論文の理念。『臨床心理学』所収。金剛出版, 印刷中。
- 田澤安弘 (unpublished manuscript a) 時間とロールシャッハ・テスト — 辻悟著『ロールシャッハ検査法』との対話。
- 田澤安弘 (unpublished manuscript b) 質的研究法としての事例研究。
- Thomas, G. V. and Silk, A. M. J. (1990) An Introduction to the Psychology of Children's Drawings. Harvester Wheatsheaf. 中川作一監訳 (1996) 子供の描画心理学。法政大学出版局。
- 辻悟 (1997) ロールシャッハ検査法 — 形式・構造解析に基づく解釈の理論と実際。金子書房。
- 上芝功博 (1977) 臨床ロールシャッハ解釈の実際。垣内出版。
- von Weizsacker, V. (1940) Der Gestaltkreis. Georg Thieme Verlag, Stuttgart. 木村敏, 浜中淑彦訳 (1975) ゲシュタルトクライス。みすず書房。
- Vygotsky, L. S. (1962) Thought and Language. M. I. T. Press. Cambridge, Mass. 柴田義松訳 (1962) 思考と言語。明治図書。
- Waldenfels, B. (1971) Das Zwischenreich des Dialogs. Martinus Nijhoff. 新田義弘, 村田純一編訳 (1986) 現象学の展望。国文社。
- Wallon, H. (1983) 浜田寿美男訳編 (1983) ワロン／身体・自我・社会 — 子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界。ミネルヴァ書房。
- Warnke, G. (1987) GADAMER: Hermeneutics, Tradition and Reason. Polity Press, Cambridge. 佐々木一也訳 (2000) ガダマーの世界 — 解釈学の射程。紀伊國屋書店。
- 鷺田清一 (1997) メルロ＝ポンティ — 可逆性。講談社。
- 渡辺哲夫 (1988) 記述学派。異常心理学講座 I 学派と方法, みすず書房。pp.47-105。
- Werner, H. (1948) Comparative Psychology of Mental Development. International Universities Press, New York.
- Werner, H., and Kaplan, B. (1963) Symbol Formation: An organismic-developmental approach to the psychology of language. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale.
- Wever, E. G. (1927) Figure and ground in the visual perception of form. American Journal of Psychology, 40, 194-226.
- Wittgenstein, L. (1967) Philosophische Untersuchungen. Blackwell, Oxford. 藤本隆志訳 (1976) 哲学探究。大修館書店。
- Wittgenstein, L. (1977) Remarks on Colour. Blackwell, Oxford. 中村昇, 瀬嶋貞徳訳 (1997) 色彩について。新書館。
- 山中康裕 (1976) 精神分裂病におけるバウム・テストの研究。心理測定ジャーナル, 12 (4), 18-23。